

場も考へて見なければならぬ、それが鑑賞である。

この期に於ける鑑賞は、先づ兒童生活に即した手近なものからはじめ、逐次程度を高めて高次の鑑賞へと進むことが大切だと思ふ。いたづらにわけのわからぬ古名蹟をもつて來て鑑賞させたところで、なんの價値もない。要は子供の力に即應したものが望ましいのである。

(二)高等科第一、二學年

この時期は國民學校の最高の學年にあたり、一應國民教育が終了する時である。藝能科習字も、初等科からの發展を考慮し、これを基底として既習教材の総合的、應用的の鍊成をなし、特に細字の修練を重んじ、新たに加はる草書の書法を指導し、鑑賞教材は古今の名蹟中から特に兒童の發達程度に即應せるものを選んで、鑑賞力を養ひ、以つて書寫能力の充實完成をはかるべきである。

■ 教授上の諸問題

一、指導過程の問題

一週一時間にされ、しかも四十分といふ授業時間で、習字學習の成果をあげるには、そこに大いなる工夫を必要とする。

實際にあつて指導しての感じは非常にせわしく、隨て本當にゆつたりした氣分で鍊成することが出來ず、いつも練習不足の感を残して授業を終るのである。如何にしたら、この四十分の間に十分なる成果をあげうるか、それ

にはどうしても一時間の指導過程に再検討を加へ、指導の簡易化をはかることが必要だと思ふ。

逐次それについて述べることにする。

イ、用具の整備。これは前時の終ると同時に休み時間中に準備させる。各自は自分の硯、筆、墨等を出して用意をなし、もし學校でまとめて購入してあれば當番に、きめられた紙数を配布させておく。

然し水はつがせず水入を使用させる。そして習字の時間が始まると同時に、適當に自分がいつも使ふだけの水を水入れから硯につがせてすらせる。これは水入れの購入など考へると不經濟のやうではあるが、實際生活には必要なものであり、その使用法を疑けることも又大切なことであるから各自に購入させて用意させるとよいと思ふ。さうすることによつて當番がかまはず水をつぎ、多いとか少いとかと言つて後からつぎ足したり、捨てたりするやうな心配もいらす、各自の墨の濃淡と水の量の關係もはつきりして、こゝに幾分なりとも時間を經濟的に使ふことが出來ると思ふ。又時間中に墨水がなくなつても、席をはなれることなくして、心一つに統一された靜淨な習字學習の場をどこまでも進展させることが出來ると思ふ。

ロ、語句の指導。教材の取扱ひに於て、眞先になすべきは、語句のよみ方及それのもつ意味の指導である。元來小學校の書方は家庭に於ける豫習などは考へられてゐなかつたのであるが、國民學校藝能科習字に於ては、この豫習と云ふのを考へてみたい。

然し豫習と云つてもそれは、家庭で何時も學校で習ふまへに教材を練習せよと云ふのではなく、讀方學習と同様、どんな風に讀むのか、又どんな意味なのか、筆順はどうかと云ふ程度の豫習を意味し、これを習慣となるまで修練し

たいと思ふ。こうする事によつて授業中に於ける語句の指導も簡明にしかも、その教材のもつ意義を十分把握させる事が出来、國民的情操陶冶の効果も十分あげることが出来ると思ふ。それを何もかもその時間中に指導すると云ふことになると、語句の指導も仲々時間をとるものである。そこで前述の如き方法が考へられるわけである。

今迄述べて来たことは大體教材の心理的方面についてであるが又論理的の方面も考へてみなければならぬと思ふ。教材のもつ論理的意味、即ち書寫する場合の教材の念所、用筆法等は兒童の練習では仲々理會困難である。然し筆順や、やさしい兒童に考へ得る用筆、結構等は初等科三年あたりからは練習に於て自發的に發見させ、授業中に於ては問答法により教師はその短所を補ひつゝ、まとめてやるとよいと思ふ。

さうすることによつて一々なにもかも教へて行く必要なく、又その時間になつて、初めて手本をみさせて考へさせるよりも能率的に指導をなす事が出来るのである。

ハ、示範と説明 教材の要點を理會させるには是非必要な過程であり、兩者相關聯して指導の中核にふれて行くのである。この點から考へると新教材に於て、基本教材に於て常に重要な役割をもつてゐるのである。示範とは教材の重點、即ち用筆法、結構法をはつきりさせる爲に、兒童の前で書き示すことで、大きな示範用紙に筆で大書する方法特別の兒童を集めて習字用紙にかいて示す方法、水書、チョークで板上にかいてみせるとかいろいろの方法がある。これらはみなそれ／＼長短があつて、はつきりどれといひ難いのであるが、大筆で示範用紙に墨書してその教材の要點をしつかりつかませる方法が一齊教授としては最も能率的な良法だらうと思ふ。説明は示範した文字又は別に書いて教材を理會させる方法であるが、これはなるべく示範と共に行ふのが非常に有效だらうと思ふ。

特に教師が示範用紙に示範しながら簡明な説明を加へる。兒童は筆をもつて腕をあげ教師の示範説明につれて筆を運んで行くところの方法は非常に効果的だと思ふ。教師が示範しながら「かう力を入れてとか、力を抜いて」とかの説明は自ら兒童の筆をそのやうに動かさせ心技一體の境地に導くのである。運筆の緩急、鋒先の運動等を知らせるには有効な指導方法だと思ふ。

然し全體として特に注意せねばならぬことは、よくその教材を見つめて、その時間の鍊成重點をしつかりきめる事であり、それに對する指導は簡明なる示範説明によるべきである。この爲に多くの時間をさくことは次の練習時間を少くすることになるので、特に注意せねばならぬ。

なほ最初の示範説明だけでは到底目的を達することは出来ないものであるから、適宜練習中にもいろいろの方法を取入れて重點鍊成の宗途を期すべきである。

二練習 練習は習字教育の生命である。習字學習に於て養はれる諸徳もこの練習を通して鍊成されるのであつて、いはゆる習字教育の根本をなしこの指導の如何によつて習字教育成果の如何を論ずることが出来るのである。

こゝまでくる過程に於ける示範説明も要はこの練習を前提としてのものであり、この練習を生かして行く爲めに行はれるのである。であるから一時間中の中心をこゝにおいて鍊成の効果をあげなければならぬ。

先づ練習の方法を考へてみるとそこに三ツある。

(イ)試書 試書は練習法の一つであるが普通示範説明の前に行はれるのである。なんの示範説明なしに兒童にかゝせるのである。兒童は自分で手本をみて工夫し、創造してかいて行くのであるから、その間に教材について兒童がど

の位の程度のもつてゐるか、又共通缺點や美點はどこかと言ふ事が見出されて教師が豫定してゐた指導重點も案外理會されてゐると云ふやうな場合も考へられ、又豫定してゐなかつたやうなところにも缺點が見出されると云ふ結果を生じて、練習効果を能率的にあげることが出来ると思ふ。随つてこれは新教材に入るときに實施して指導の重點をどこにおくべきか、如何なる點から指導すべきかを知るに便利であるが低學年には少し無理だと思ふ。

(ロ) 臨書 手本を見ながら練習する方法で、結構用筆を知るに都合よいのみでなく、筆力、骨法等を養ふには最もよい方法であるから習字學習の本體とすべきものである。そこで用筆法、結構法に特に注意して指導をなし、精神のこもつた立派な字を書くやうにせねばならぬ。然し始終手本ばかり見せてかゝせてゐるとそれが習慣になつてたゞ機械的練習を繰返して何等進歩のない學習に陥り易いのである。そこでこの弊害を少くする學習方法に背臨がある。

(ハ) 背臨 これは臨書によつて練習した後、手本をみせないで練習させることである。これは臨書によつて學習した力を試みるのに大いに役立つし又教師自身の指導の反省資料ともなり兒童の學習の反省にも大いになるのである。これを清書にまで進めて行くと、兒童は手本を見ないで、清書をかくのだといふ考へからそれ迄の練習も實を入れずやらなければならなくなるので兒童の實力を能率的に養ふためには最上の方法であり、これに依つて兒童の工夫創造力も充分養ふことが出来ると思ふ。とに角手本を見なければ、字がかけない様では、實際生活には役立たぬことになる。

この點から考へて見ても背臨による錬成と云ふ事は非常に大切なことだらうと思ふ。尙臨書の如く一點一畫に注意してかくのと違つて、書想のむくまゝに精神の統一が出來、随つて筆脈や運筆の緩急が自然になり筆意の一貫した元

氣のあるのび／＼した字をかくことが出来るのである。書の實力養成から考へて大いに研究すべき部面ではなからうか。

前に述べた如く、今迄修練した自分の實力をもつて手本なしでかゝせてみることも必要だらうと思ふが又手本には全然ないものを自分の力で書寫することが國民教育の上から考へて如何に大切なことなるかを考へ郷土や兒童生活中から材料をとり指導する事も必要なことだと思ふ。従來の小學校書方教育に於てはこの背臨、自運の如き練習方法はなんとなく閑却されてゐた様な感がある。國民學校に於ては大いにこの點に留意し、研究して習字學習の成果をあげるやうに努めねばならぬ。

本、批正 批正は練習過程に於ての缺點を正くする方法であり、練習と批正とは二にして一、これ無くしては練習効果を充分あげうることは出来ないのである。重點の明らかにされた文字を練習し、それについて、いろ／＼批正を加へて行くことによつて、立派な成果をあげるのである。こゝで篤と腦裡に納めておくべきことは、批正すべき點を盛澤山にのぞまず、その時間における錬成重點に關係のある書の本質的のもの二三について指導をなすと云ふことである。あれもこれもといふ事は、結局批正點をはつきりつかませることが出來ぬ。一時間になつてしまふと思ふ。随つて教師は大いに兒童成績の長所を認めて、これを賞揚し、少量の缺點指導によつて効果を能率的にあげることが肝要である。左に批正の二三をあげてみると、

(イ) 自己批正 これは自分の作品を自分で手本と比較しながら批正することである。これを練習過程中任意に行はせることは能率的習字學習の指導の上から最も適切有效であると思ふ。然しこれが教師の命によつて行はれるやうで

は眞の價値を發揮することは出来ないのである。

要はこれを習慣にまで修練をつみ、だまつてゐても、いつも習字學習のときには自然にこの態度があらはれるやうにしたものである。さうすることによつて短い習字時間も有効に能率的に指導を進めることが出来ると思ふ。

(ロ)教師批評 兒童の前で長所缺點を指摘し、説明しながら加朱批評する方法である。いはゆる机間巡視しながらの個別指導であつて兒童の直観に訴へることが出来ることから、それだけ効果が大きいと思ふ。或は特別な兒童のみを一所にあつめて分團的の指導をなす場合にも非常に効果的だと思ふ。

(ハ)共同批評 共通缺點ある作品を貼布して、全兒童に示しながら、その美點を賞揚すると共に缺點を批評することで、非常に能率的な批評方法である。然しこゝで「なにかも」と言ふことになるとかへつて複雑化して能率的な經濟的な批評は出来ない。それには先づ主なる共通缺點のみをしつかり指導し、末梢的のものにはなるべくふれず、大いに長所を指摘して賞揚するやうにしてやりたいと思ふ。

こゝに大體批評の三つの方法について述べて来たが、批評の念所は、やはり先づほめてやること、然る後に缺點の指導をなすこと、しかもその指導は重點主義でと云ふことである。

(ヘ)鑑賞 鑑賞によつて作品に対する認識を深化することが出来ると同時に、すぐれた作品に接することによつて自己の書美についての情操を深め且その範圍を廣めることも出来るのである。特に日本独自の藝術に接することによつて我等は日本的なる情操を十分練成することが出来るのである。國民學校の藝能科習字に於ては前に述べた如くこの鑑賞と云ふことを非常に重視してゐるのであるから、兒童の作品、教師の書、手本の文字及現代の書道の家書や、

更に進んで古人の名蹟に至るまで、これらを鑑賞教材として取上げ、手本の鑑賞とか、教師の書を見せるとか、又その場で示範して見せるとか、すべて習字の普通授業を通して適宜指導して行きたい。何も鑑賞の時間を特別に設けてやる必要はないであらう。少ない習字の練習時間をこのためにへらすと云ふことは大いに學習の効果をそぐことになるのである。以上の見地から鑑賞教材について考察すると、

(イ)兒童相互の作品 これは兒童の生活に最も近いものであり、それだけに親しみのあるものである。これらを批評、鑑賞させることによつて自分の作品と比較し、長所缺點を見きはめて練習の基礎となして行くことが出来る。たと同じ學級の兒童作品のみでなく、他學級のもの又は上級生の書いたものなどを持つて來て鑑賞材料とするのも發憤の動機となつて非常に有效と思ふ。

(ロ)教師の書 教師のかいた文字は、手本の文字の如く出来上つたものに比較すれば劣るわけであるが、兒童の前でかくことに依つて、そこまで行く過程、即ち用筆法、執筆法、腕法等も明瞭となり、立體的にその文字を鑑賞させることが出来るのである。それ故兒童に對しての影響も大きいわけである。

(ハ)手本の文字 手本は兒童に對して書の規範を示してゐるものであるから、學習方向を定める上に於て最も大切なものである。随つて用筆、結構等すべて手本の文字を中心として練習すべきである。鑑賞に於ても手本を第一とすることは當然で、手本の長所を十分に理會して、書に對する認識を深め鑑賞眼を養成せねばならぬ。

(ニ)古人の名蹟 古人の名蹟及偉人の墨蹟等は非常に貴重なるものであるが兒童に理會出来るものと、出来難いものがある。随つて兒童に鑑賞させる場合にはよくこの點を考慮して指導せねばならぬ。即ち兒童にわかり易きものと

云ふことを中心として考へたいものである。然しこれは低學年には到底考へることの出来ぬ鑑賞故實施にあつては高學年に於て考へなければならぬ。

二、筆の問題

藝能科教授上の注意にも「筆を重じ云々」と云ふ項目が入れられてゐる通り、國民學校の習字教育に於て筆と云ふことが問題として取上げられるやうになつたのである。習字教育はたゞ文字の書寫能力を錬成するだけでなくそれを立派に書寫し得る態度を育成することも又肝要である。この二者相まつて學習効果をあげ得るのである。でそこに特に筆が問題となるのである。

では習字に於ける筆といふのは如何なるものか、それは用具の取扱ひ、磨墨法正、しい姿勢、執筆法、腕法、潤筆法、用紙の使用法、成績物の整理から清潔整頓の美風を養ふ事、沈着な態度を育成すること等種々あげることが出来るのである。

イ、用具の取扱 硯、筆、墨、水入等のをくべき場所を習字學習に便利の様に一定する必要がある。それを大きな箱に硯を入れて机の上に出したり、大きな雑巾の上に出したり、大きな雑巾の上に出したりして雑然とおくことは習字學習に支障をきたし、机の上に墨水を流したり、筆を落したりするやうになるのである。要は家庭生活への發展を考へ合理的にとかく習字學習に便利な用具の配置を考案し、なるべくせまい机上をひろく使用出来るやうに訓練したいものである。それから、そのみでなく用具を大切にすること、丁寧に使用すること等を入れ、習慣づける必要があると思ふ。例へば硯の中に墨のかすがたまつてもそのまま、使用してゐて洗はなかつたり、筆の取扱ひを粗雑にして早く使用出

來なくしてしまつたり、まだ充分使用出来る墨を「もう使へない」と言つて捨て、しまつたり、よつれた雑巾をいつまでもそのまま使用してゐたりするやうなことのないやうにせねばならぬ。これらは用具の取扱ひとして特に注意して指導せねばならぬ點だらうと思ふ。

ロ、磨墨法姿勢執筆法腕法等 練習に墨汁を使用させると云ふ方法も考へられるが、習字學習の本質から云つて、時間のはじめに墨を磨らせることは、落着いた學習の場を醸成させる上にも、又日本國民としての教養を高めて行く上にも非常に必要なことである。随つて最も正しい磨墨法を指導し錬成しなければならぬ。其の他姿勢執筆法腕法等についても同様、十分修練をなし皇國民としてはづかしくないとこの書寫の態度を習慣にまで錬成しなければならぬ。

ハ、其の他の問題 その他、用紙の取扱ひなども充分考慮して、無駄がきなどは絶対させぬやうにせねばならぬ。それには用紙を共同で購入しておき、習字の時間には枚数をきめて配布し、それ以上書かせぬと云ふやうな方法をとつたら紙の節約も出來、これ以上使用する事が出來ないと云ふ點から一枚々々の練習にも實が入つて習字學習の能率もあがることと思ふ。とにかく紙を無駄にしないと云ふ習慣をつけることも、現下の日本國策の上からも非常に大切なことだらうと思ふ。それに次いで考へなくてはならないのは成績物の處理である。兒童の中には、かへすとまるめてポケットに押込んだり、鼻をかんで捨てたりするやうなものが見受けられる。これでは眞の習字教育が出來たと云はれない。どこまでも自分の力のこもつた尊い成績物なることを自覺させて、丁寧に保存させるやうに習慣づけなくてはならないと思ふ。今迄の習字教育は、たゞ手本を習はせて清書を出させそれに評點をつけてかへしてやるま

で、それから後の事などは殆んど閉却されてゐたやうな感がある。習字教育に於ける眞の躰は、たゞ狭き教室内だけの問題でなく、これが家庭に更に國民生活にまで進展すべきものであることを充分自覺して指導する必要があると思ふ。

三、手本の問題

前述の如く國民學校になると、又新しく習字の手本が出来るのであるが、筆者が代れば今迄毎日最高無上のものとして指導してゐた小學校書方手本と比較して自らすべての點に於て變つたものになると思ふ。それ故過渡期に於て我々はこの二種の手本をもつて教室に臨まなければならぬ。そこでこの矛盾を如何に解決すべきか、當面の問題になると思ふ。然し今迄の習字教育は手本中心であつて、これまで教授要目も教授要項も示されずたゞその時の手本によつてそれを忠實に指導して來たのである。たしかに今迄の習字教育は、あまりにも無計畫すぎた感がある。少なくとも今度の藝能科習字にあつては教授體系なり指導要項をしつかりきめて向ふところを明瞭にしたいと思ふ。

従來の如く手本に釘づけになつてゐては到底國民の書寫能力の養成は出来ない。その手本の持つ書風とか筆法とかいふ末梢的なもののみ汲々としてゐては結果主義に陥りしたがつてのび／＼とした習字教授は出来ないのである。そこで問題となるのは指導者の教養と云ふ點である。指導者が根本的な修養をなしてゐれば、つまらぬ技法やなにかにとらはれて神經過敏に振舞はなくともよいやうになるのである。

今度新しい筆者のちがつた書風や筆法の多少異なる初等科一、二年の手本が出てくるが、出たからと言つて別に書の内容が變つたのではないのであつて今迄の書方手本を全然無視すべきものではない。

要は教師自身の修養によつて書の本質をつかみ、たとへ手本が二種あらうと三種あらうとそれを活用して指導に役立たせることの出来る實力を作つて行く事が必要だらうと思ふ。

かう考へて行くと結局國民學校藝能科習字の向上はたへざる教師の修養によつてのみなされると云ふ事が明瞭に言ひうるのである。

藝能科圖書

I 藝能科圖書の本質上の問題

一、藝能科圖書の目的

藝能科圖書ハ形象ヲ看取シ表現シ且ツ作品ヲ鑑賞スルノ能ヲ養ヒ情操ヲ醇化シ創造力ヲ涵養スルコト

1、看取・表現・鑑賞の指導 形象とは形態現象のことである。形象は主観でもなければ客観でもない、主客融合の間に生ずるものである。従つて自然科学的分析的の觀察といふ語を用ひず「形象ヲ看取シ」となつてゐる。こゝに藝能の修練の意味が存する。かゝる態度での表現・看取・鑑賞は身を以て理解することに依つて始めて生活の奥底に達し性格の深さに及ぶ。生活の深さに達することは皇國の道に自ら連るのである。かゝる形象の看取・表現・鑑賞の養成は行を通しての生活形成であり、論理的理論的理解であると共に、表現的感性的發動的理解でなくてはな

らぬ。こゝに看取・表現・鑑賞の錬成面が考へられる。金原省吾氏は云ふ。海員養成の場合に之をポートやヨットや和船でみつちり仕込まねばならぬ。最初から優秀船へ乗せて教へると一應は間に合ふのみならず却つて早道である。しかし平穩無事の時はよいが一度危急の時には精神的身體的に雲泥の差があると。こゝでねらふ形象の看取・表現・鑑賞の指導はかゝる意味を持つ基礎的錬成でなくてはならない。

2、情操の醇化・創造力の涵養 皇國民たる要素としての情操の醇化は圖畫科にとつては看取・表現・鑑賞の適切なる指導を措いては他にない。創造力の涵養にしても單なる美しい畫面を構成するだけでは物足りない。造形文化への創作的基礎訓練を通しての皇國民型成の根柢をねらふものでなくてはならない。即ち基礎的錬成としての創造力の涵養である。しかも之等は藝能の修練をとほして皇國の道に歸一するのである。

二、藝能科圖畫の陶冶的定位置

藝能科圖畫の目的とする錬成面はどこまでも一文化人の持つべき要素としての美的教養ではなく實踐實習の圖畫といふ具體的行を通して日本的場の成員性格を育成するにある。即ち日本藝道の修練にある。そしてかゝる具體的な圖畫を通して皇運を扶翼し幸る皇國民の錬成がなし得るのである。かく圖畫を皇國民錬成上不可欠なものとして定位置するところに藝能科圖畫の存在がある。

I 藝能科圖畫の教材と教育方針の問題

藝能科圖畫の教育方針は國性論的立場と心性論的立場を取る。又教材に如何にそれ等が具現されなければならない

か。以下各項にわたり考へて見ることにする。

一、國性論的立場

1、感性的立場

(イ)國民的情操の涵養 高尚な國民的情操の涵養は皇國民たるの要素に外ならない。特に東亞の文化の指導的立場にある民族としてかゝる一面を缺くことは出来ない。文化的接觸こそ眞に理解し合ふ根本である。知的實用的方面を強調する餘り感性的藝術的趣味的方面が閉却されるとすれば藝能科圖畫としての生命を失つてしまふ。藝能科の各科目は各その特性を發揮しつゝ相互關聯して國民的情操の陶冶に努力しなければならぬ。圖畫としては看取・表現・鑑賞の指導を通して常に之が錬成をなし、眞に日本文化を把握せる皇國民を育成しなくてはならぬ。

(ロ)眞摯なる態度の養成 眞剣な氣持をいふ。こゝに日本藝の奥儀が存する。「物に往く道」物になり切ることである。林檎を描く時には林檎になりきることである。畫聖應舉に松を描くの道を開けば松のことは松に聞けといふ。物心一如の姿である。日本には古來柔道といふのがある。相手の力に順ふのが柔道の極意である。又劍道にても「敵が斬られに寄る處を斬る」といふ。こゝに没我隨順の道がある。日本藝道の根本精神も同様である。それを現代に顯現して行くのが藝能科であり、藝能科圖畫である。

(ハ)傳統的技法の尊重 傳統的技法の尊重といつてクレヨン・クレパス等を捨てるのではない。これ等は兒童のものに消化され生活の中に入つてゐる。もつと廣い意味で解釋すべきである。

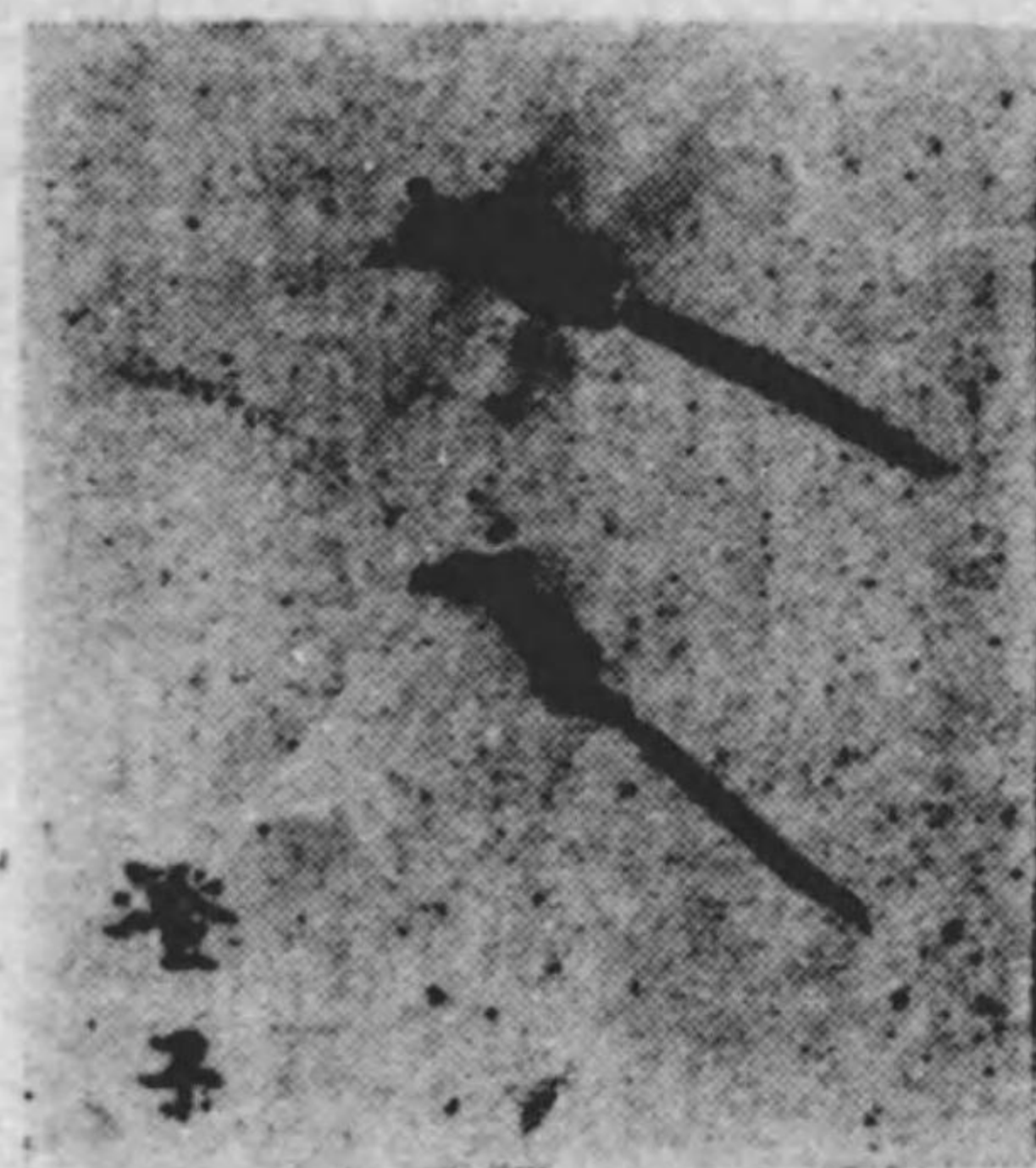
先人の築いた傳統を無視しては今日の文化もなければ次への發展もない。この傳統に日本的な貴さがある。傳統的



征東御皇天武神 2.



ほん 3.



魚 4.



技法は鑑賞に依つても或程度の理解は可能であらうが、眞の理解はその技法を體認して始めて出来る。こゝに表現に於いての傳統的技法の尊重が重視されるのである。傳統的技法とは線と墨の濃淡であらはされる水墨繪を指すのである。この線と墨に日本的な性格が存してゐる。即ちこの線の中に日本人の感じ方、見方、考へ方が心のまゝに動いてゐる。勿論兒童に専門的な日本畫を要求することは出来ない。古い形式を強制するのはかへつて傳統的精神に反する。兒童の心性に合致した技法に於いて水墨を用ひ描かせ、その中にひそむ傳統的な精神を把握させることが大切なのである。習字との關係を考慮し、兒童心性に留意して取扱ふべきである。

鈎勒描法・沒骨描法ともに取入れるのであるが、低學年では線を中心として鈎勒描法の方が入りよい。進んでは沒骨描法に入り墨の濃淡の感覺をも擱せたい。又兩者の中間的な技法も取り、或は水彩繪具で着彩し或はクレヨン・クレパスと併用してもおもしろい。題材にも日本的なものを取り——神

話・史話等——寫生にても草花・雜草・動物・果實等、又風景も取入れたい。形式も繪卷の形式をとらせてみて繪物の鑑賞に聯關させるもよい。

「少産名のみこと」——寫真(1)

讀本卷三、十三にある。その表現形式を水墨にとり線描した後、墨の濃淡で調子を着けたものである。内容を仔細に検討すると物語の中に讀本以外に兒童の持つ豊かな創造心がもられてゐる。表現形式は繪卷物の形をとり繪卷の鑑賞と聯關する。

「神武天皇御東征」「とんぼ」「魚」——寫真(2)(3)(4)

試に色紙へ描かせた御東征數枚中の一部である。鈎勒描法である。「とんぼ」「魚」の方は沒骨描法である。技法のみでなく白い紙へ水墨で描く時の精神的效果を見のがしてはならぬ。

「八岐をろち」讀本卷三に連絡。

古團扇の紙を貼更へて更生したものに水墨で描かせるのも夏の涼をそゝる。

かゝる水墨も硯・墨は習字用のものを、筆も習字用の古いものを使い、水入れは空罐、それに皿を用意し、用紙はワラ半紙、障子紙(一本あれば學級で數回使へる)手に入らなければ包裝紙の裏面使用又水墨によるクロツキ練習は新聞紙を利用してよい。

2. 知性的立場

(イ)高度國防國家建設への積極的協力 國を擧げて政治・經濟・産業等高度國防國家建設に努力してゐる今日、圖

書に於いてもこの重要な役割の一端を直接間接に荷負つてゐる。軍隊教育上機械化國防教育が要望されてその要求に具體的問題として簡単な機械的設計圖の読み方、各種線の書き方、各種形の現示法、各種色の見分け方等が擧げられてゐる。これ等何れも各教材にわたつてそれがそのまま生活の型成に及び積極的に協力して行くべきである。

職業指導的立場からはなほ作業に従事する者への要求としてかゝる知識とともに、機械器具の取扱ひ、圖面への關心、忠實正確に作業に當るの心構へ等を要求してゐる。これ等何れも圖書工作に於いて涵養されるべき精神である。かうした態度の錬成をとほしても高度國防國家建設へ協力しなくてはならぬ。教材としては特に用器畫・圖案と密接な關係を持つ。

高度國防國家建設の立場から重視すべき事項

- (1) 機械的設計圖の描圖讀圖
- (2) 機械器具に關する描圖讀圖
- (3) 線の種類の理解
- (4) 寫生的現示法
- (5) 形態・色彩に關する知識

(ロ) 工夫創造力の養成 國民の工夫創造力が貧困であつては一國の産業の發展は望まれず、美術工藝は振興せず、加ふるに、生活の改善合理化は望まれず、國力の充實は期し難い。表現指導に當つて技能の修練とともに兒童の創造力を重視し、暗示示唆を興へ工夫考案させ發明的發見的態度の養成に努めなければならぬ。美を愛する心の發動に於ての觀察を密に、直覺力を鋭敏にしたい。なほ鑑賞も創造力の養成の動機としたい。かゝる精神で造形文化への工夫創造の基礎が出来てこそ國家的要求を滿すことが可能である。

(ハ) 形態色彩に關する基礎的知識の養成 從來の圖畫にない一つの特徴である。合理的科學的知性的方面が考慮さ

れその現れが「形態色彩ニ關スル基礎的知識ヲ授ケルコト」となつた。國防的見地からの要求は迷彩・機上から見た都市・毒ガスの色彩反應等科學的に色別する感覺の養成をはからなければならぬ。それには色彩教育の系統案を作りそれに従つて組織的修練が必要である。概念的な知的な色彩の認識では満足出来ない。身についた感性に訴へた眞の知識とならなくてはならぬ。

形態の學的研究はまだ不充分である。しかし抽象形態のみを指すのではない。具體的な物形態も包含する。

なほ色彩・形態の指導は抽象的に形なり色なりを扱ふのでなく、どこまでも具體的事物に即して取扱ふべきものである。

思想畫・寫生・圖案・用器畫・鑑賞等その教材の中に常に生きた形態・色彩の指導が行はなくてはならぬ。

二、心性論的立場

兒童心身ノ發達ニ留意シ男女ノ特性、個性環境等ヲ顧慮シテ……とある。兒童の心理的發達段階及社會的環境を重視してこれに適合した教材を選択し、適切な取扱ひをなすことは言ふまでもない。これが重視の現れとして未分化から分化への綜合教授の問題があり、教科及び科目の統合がある。この意味に於いて圖書でも描畫能力の發達・鑑賞能力の發達を充分考慮しなければならぬ。そこに男女の特性・個性・環境も考慮されてくる。又「兒童性能ノ伸長ニ力ムルコト」とある。藝能科の指導は個性的性質を多分に持つて居り個別的指導の機會も多い。實踐的學習に當つて教師・兒童の個性がよく現れて来る。機會に應じて充分これが能力を伸長させるべきである。しかし個人主義的な立場立身出世主義的立場で個性の伸長に力めるのではない。國家的立場・職能的立場に於いて各自の性能を發揮した

い。歴史的に運命付けられた日本國家の中で自己もその中の一成員として全體に奉仕する立場に於いての性能の伸長である。

一齊指導中に於いても個性の指導が必要であり、又共同作業に當つて能力に應じた作業をさせ各分野に於いて自己の持つ性能を發揮させる様に全體への奉仕を考へたい。

三、教 材

次に教材に如何に具現されなければならぬかを考慮することにする。

1、思想畫 兒童の心理的發達段階に適應せる教材を學年的に系統付けて選擇しさらに國家的立場より考慮されなければならぬ。内容形式ともに趣味的興味的に兒童におもねることは絶対に排斥する。日獨伊親善圖畫に現れたドイツ兒童の作品により想畫を通じて如何にナチス精神の昂揚に努めてゐるかを知らることが出来る。題材を通じて國家意識を強調し皇國の道に歸一させなければならぬ。こゝに藝能科圖畫としての思想畫の方向がある。低學年に多く課するのはその心理的發達から當然であるが、中高學年に於いても國家的教材を考慮して現在以上相當量の増加を要求したい。指導法に於いても内容の取扱ひたる題目の割合に止めず、低學年では人物の臨畫的取扱ひ進んでは人物の寫生的取入れ等内容と共に形式方面も重視すべきである。日本の繪は精神的であり人物的生活的に描かれてゐる。我々はかうした方面でも古い畫から學ぶ事項が多い。低學年では思想畫を通じて生活指導をなし進んでは造形方面の陶冶にも考慮を及ぼし、意識的な構成工夫創作力の養成にも進みたい。表現法はクレヨン・クレパス・水彩の他に水墨を用ひ色紙・寫眞貼付等も取入れる。

具體的題材に就き例を挙げれば、

5、八岐なろち



- 國體觀念を強調したもの——神話・史話・參宮旅行等 寫眞(1)(2)(5)参照
- 時局的なもの——二千六百年奉祝・應召兵見送・英靈を迎へる・歸還兵を迎へる・傷病兵慰問・戦死者の墓參等
- 國防的のもの——戦争畫・防空演習等
- 郷土的なもの——八幡宮祭典・流鏑馬……等
- 興亞精神を強調するもの——日滿支親善・日獨伊親善……等
- 體育武道に關するもの——大和行進・神社行進・柔道・劍道・寒稽古・太陽燈照射・體重測定・肝油服用……等

○機械器具の工夫考案・創作發明——武器の考案・飛行機・戦車・軍艦・自動車・潜水艦……等
これ等藝能科圖畫の思想畫として強調すべき一方向である。

2、寫生畫 視覺的な正確な寫實がすべての基礎になるのは言ふまでもない。形象を看取し表現する態度は對象を變形し置換へることでは絶対にない。眞にそのものになりきつて描く態度が大切である。そこに自ら對象の持つ生命感把握が出来るのである。渡邊華山の遺作展を見ても分る通り大忠大孝の華山の傑作は題材の上では忠孝と何の縁もない「千山萬水」の類である。しかも此の作には造形上の嚴しさがあき、いき／＼とした韻律と深い情操とがある。とのべてゐるのを見た。寫生に對する態度はかくありたいと思ふ。

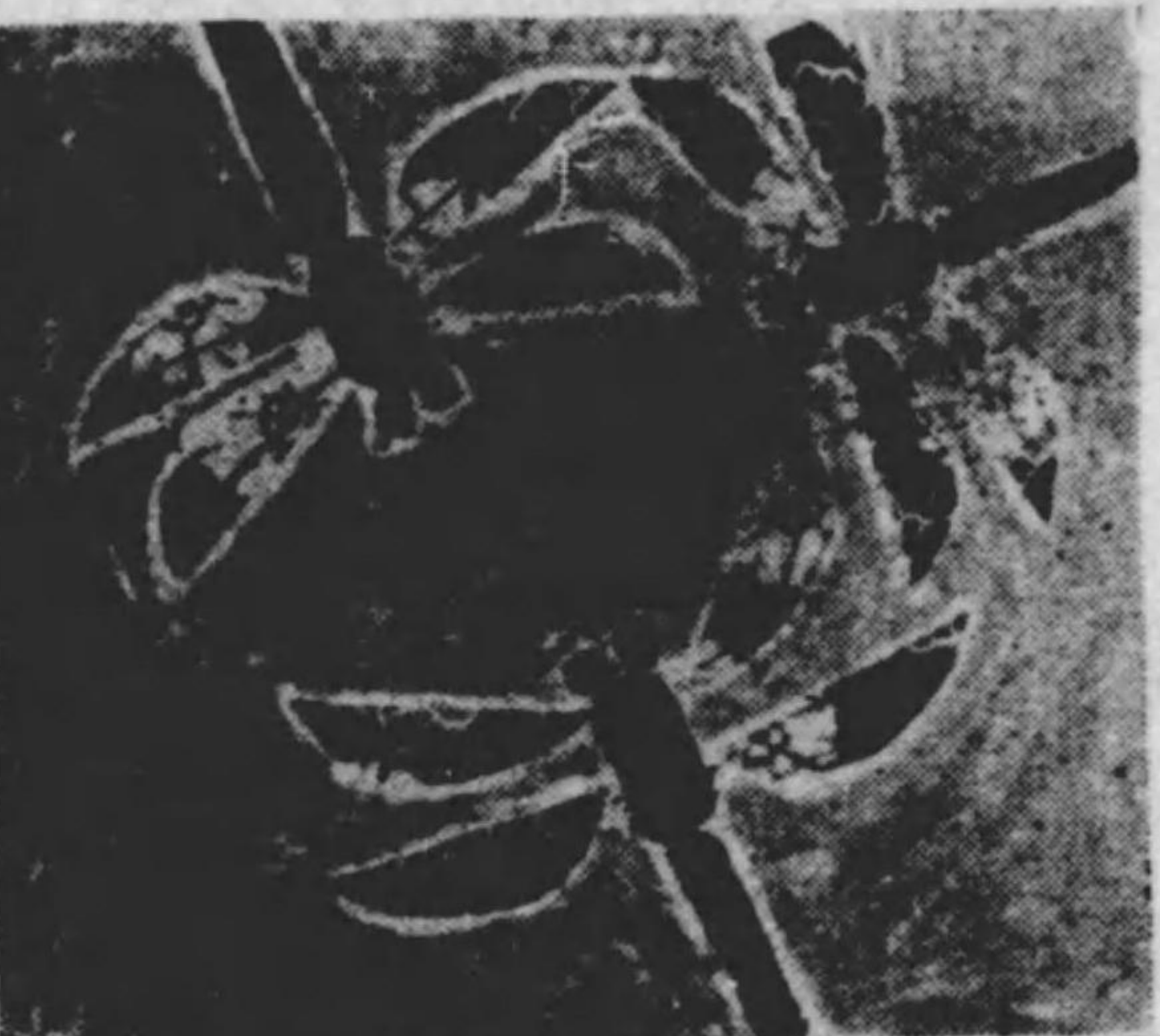
形象の看取・表現には対象をあるがまゝに描出する眞的描現と対象の美しさを擷んで描出する美的描現とがある。何れも輕視してはならない。なほ餘りにも分析的概念的に取扱ふのは皇國民鍊成の立場より又兒童心性の立場より警戒すべきである。

(1) 形態・色彩・調子の觀察表現 (2) 量・質・統一に對する觀察表現 (3) 植物・昆蟲等の精密描寫 (4) 機械・器具・器物等の基本的形態及機能的形態の正確描寫 (5) 簡單な現示圖 (6) クロッキー
以上特に重視すべき事項であるが學年的發展に伴ひ適當に取捨されるべきである。

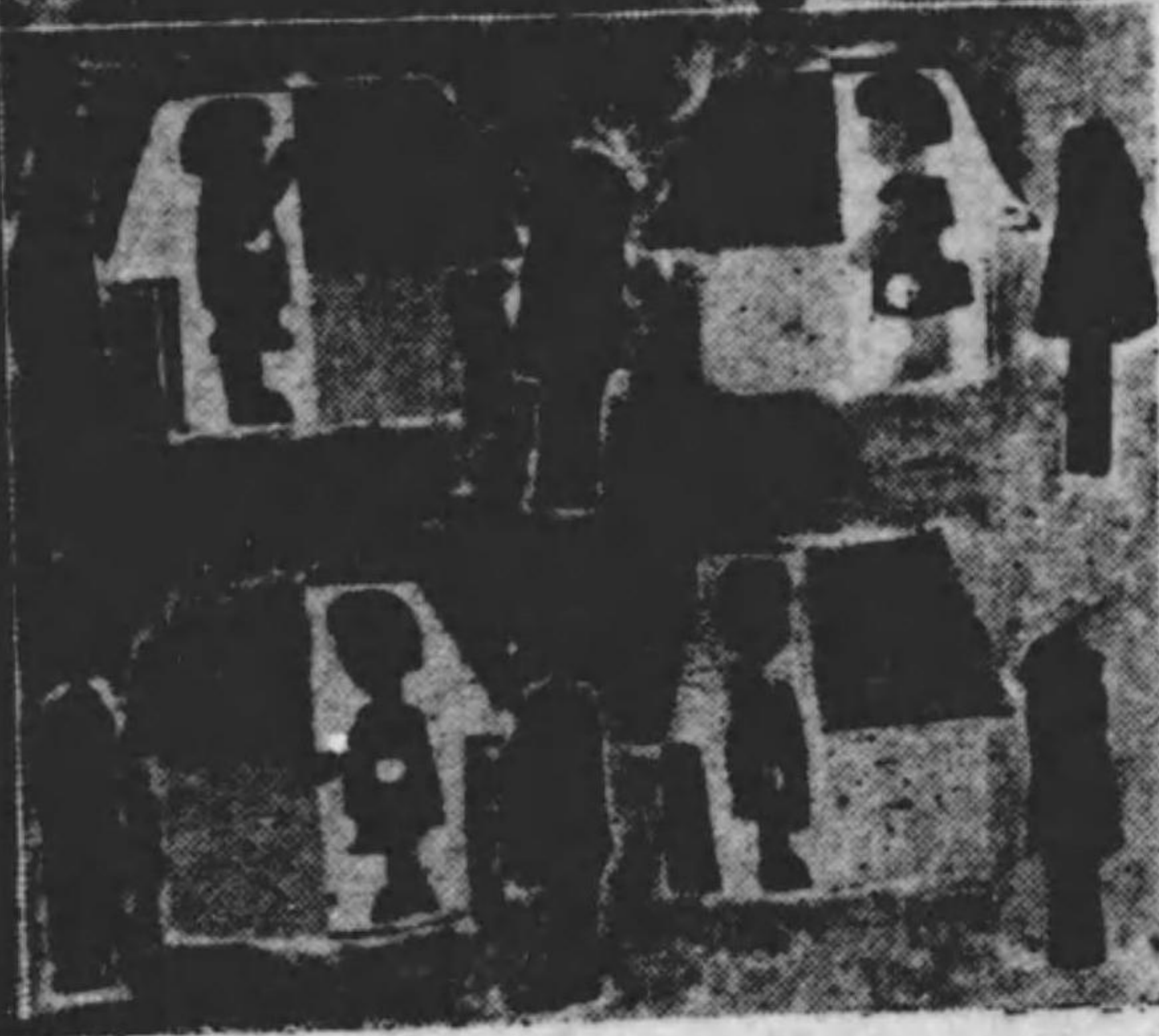
3、**臨畫** 臨畫は特に表現様式・表現技巧を理解するに役立ち、又これに依つて其の體驗を通して眞の鑑賞に至る爲のものがある。その内容に形式に臨畫の持つ意味も重要である。特に傳統的技法たる水墨畫を授ける場合等これの利用が役立つのではあるまいか。

4、**圖案** 純粹構成と應用構成とがある。從來の如き狭い圖案であつてはならない。平面的な裝飾的な圖案より進展し立體的な多面的な生産的な機械的な取扱ひも考慮され、さらに實生活とも關聯し工夫創作の態度を養成し、質的量的に擴充されなければならぬ。この意味に於いてその題材に表現形式に一步進んだ取扱ひが必要である。從來は題材も花・鳥等枯死したものが用ひられてゐたが兒童心性に適合した實物を並べさせ、取材も體操をしてゐる人・隣組の圖案・飛行機を並べる、器具の圖案等漸進的なものを取入れたい。その形式もクレヨン・クレパス・水彩等ばかりでなく、實物・色紙・布・金屬・砂・針金・糸・包裝紙等を用ひ、視覺的平面的な圖案より觸覺的立體的な圖案へと進展させたい。又之等は生活と關聯し、設計・創案は工作・裁縫・手藝と關聯し、創造力の涵養上からも重視すべきである。

8、材料を用ひた圖案



6、隣組



ある。ポスターは思想宣傳と結合し精神的協力と工夫考案力の養成にも効果がある。二三の例として

○隣組の圖案——寫眞(6) (7)

「とん／＼とんからりと隣組」と歌ひながら圖案が出来。畫用紙に家の形に穴をあけ、これを折つて出つばらし、家を立體的に作り、

○包裝紙・色紙で貼りそれに手を舉げた人物を貼り「廻してちようだい廻覽板」が出来。木が植えられる。

それでゐて色に形に配列に統一されてリズム的な美しさが歌と共に浮いて来る。隣組の心もかくありたい。

○材料を用ひた圖案——寫眞(8) (9) 参照

包裝紙・布・セロハン・セルロイド・金屬・砂・針金糸等それにクレパスを用意し之を利用して感覺的な立體的な裝飾的な圖案を作る。之に光線を當てれば陰影による變化を現し美しさが一層生れて来る。これが基礎となり手藝・裁縫と關聯して草履・ハンドバッグ・

9、材料を用ひた圖案



7、隣組

テーブルセンターさらに服飾と發展して行く。

5 用器畫 用器畫は工作と連絡し簡単な平面幾何圖法・投影圖法・展開圖・斜投影圖の基礎的理論を取扱ひ又透視圖法は自在畫と關聯して理論に偏せず實際に即して扱はれるものである。コンパス・定規・尺度等の使用法會得とこれによる精密な製圖も或程度の要求をのぞむのである。しかしして圖畫の扱ふ部分は基礎的部面で工作へと發展していく。なほ算數とも密接な關係を持ちその内容上にも考慮すべき問題がある。又描圖をとほして讀圖力の養成もはかりたい。國防國家建設の立場からこの方面の技術・態度の鍊成が必要である。特に強調すべき部面を挙げれば、

(1)機械器具の描圖と讀圖 (2)建築物の描圖讀圖 (3)原圖の引伸し縮尺 (4)地圖の描圖讀圖 (5)各種線の書き方
6、鑑賞指導 鑑賞は看取・表現と同時に進められるものであり、その範圍は兒童作品・教師の作品・現代作家の作品及複製品東西名畫の複製品を始め繪畫のみならず建築・彫刻・工藝と造形美術のあらゆる部面にわたつてなされるべきであり、又飛行機・自動車・軍艦・橋梁等の現代の機能美も鑑賞させなければならぬ。さらに日本國土の自然美の鑑賞も忘れてはならない。

國民的情操の陶冶からも我國土の自然美を鑑賞させ此の國に生れた有難さをしみく感得させたい。さらに日本の傳統的技法を知る意味に於いても日本的なものにつき從來より一層の努力がはらはなくてはならぬ。知的に分析的に知ることも大切であるがそれ以上にその作品に宿る精神を掴ませることが涵養である。時間的には高學年に於いては特定の時間が設けられるがそれも少數であらう。しかし鑑賞の指導は平素機會ある毎に行ふべきである。又遠足・

校外修練・見學等の行事とも聯關してやつていきたい。現在各地に常設的な鑑賞陳列場が無いため不便も多いが出来るだけ資料の蒐集に努めること。又スライドを用いた幻燈或は實物幻燈の設備もほしい。又展覽會・博物館等の見學の機會も作ることがのぞましい。

鑑賞資料蒐集に當つて留意すべき點を挙げれば、

- (1)國性的立場から之に合致したもの
 - (2)兒童の心性に適したもの
 - (3)多方面にわたること
 - (4)なるべく大きく印刷のよいもの
 - (5)寫真版より原色版の方がよい
- 鑑賞施設も壁面利用經費の點より困難であるが現在實施してゐるものを挙げて参考にした。
- (1)廊下への兒童作品の展示(簡単な説明を加へる。一週間に交換する)
 - (2)廊下への東西名畫の展示
 - (3)圖書室へ東西名畫選の常備——常に自由に鑑賞出来るやうに
 - (4)兒童に諒解出来る範圍の名畫解説といった書物の常備——
- 現在では良いものが少い (5)圖書館の見學 (6)その他展覽會の見學

■ 藝能科圖畫の鍊成の問題

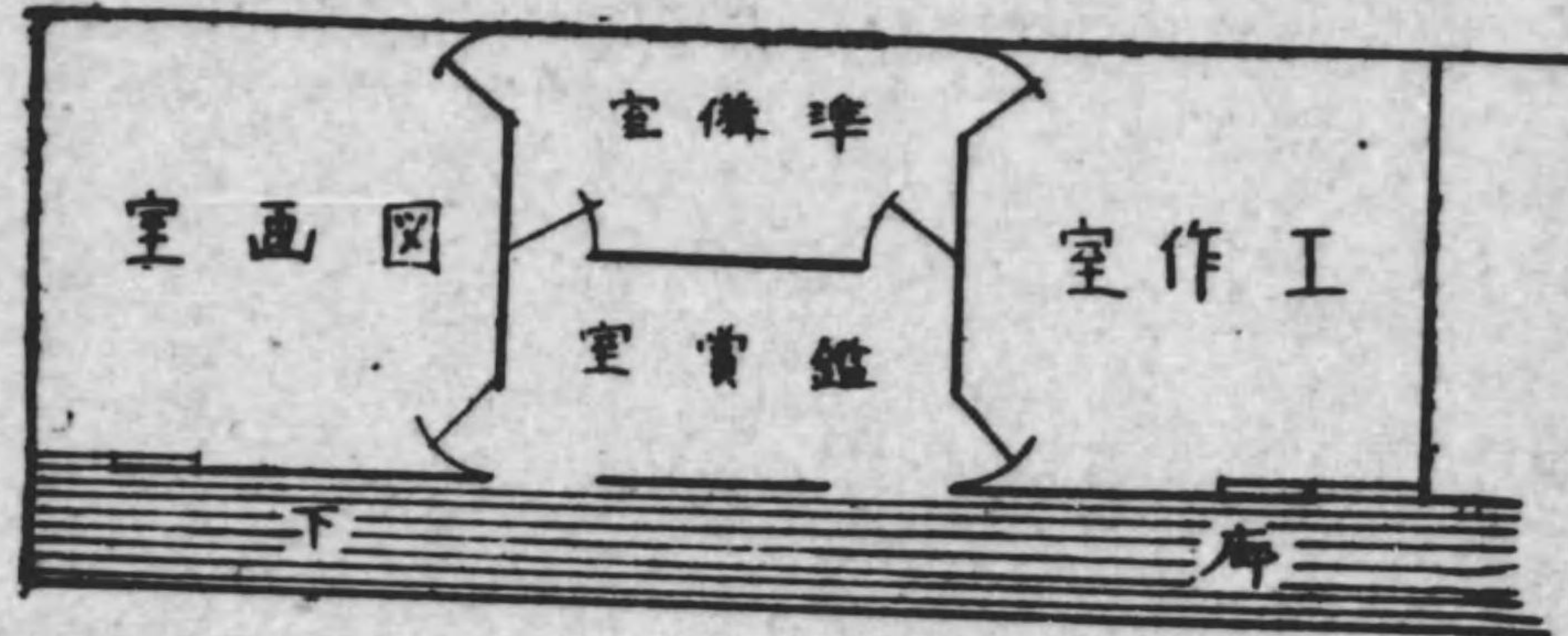
藝能科圖畫の本質を基底とし、教材・教育方針に則つて如何なる鍊成的場を持つべきかを場の靜態と動態に分けて考慮して行かう。

一、場の靜態

1、鍊成的場の構造 日本藝道實現の道場としての教室でなくてはならぬ。教師と兒童と相共に「没我隨順」する

(部一) 表覽一地生寫内境宮幡八

番號	寫生地	學年	季節				時間	注意事項
			春	夏	秋	冬		
9	八幡宮(石段上から)	2 3 4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	低学年は思想的、中高学年は大きくつかむこと、場所はいろ／＼ある、参拜人に迷惑をかけるな
8	八幡宮(石段下から)	3 4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	拜殿の形に注意、石段を入れる、いてふの木立の立體感を出すこと
7	八幡宮(太鼓橋から)	6 一 二	○	○	○	○	○	参道、雨側の木立、舞殿、拜殿を入れる、色の變化に注意、左右木立の明暗
6	若宮	4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	難しい、建物の透視に注意、建物の赤い色に氣付ける
5	源平池	3 4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	低学年は池を、高学年は鳥から遠景を夏は蓮も面白い、割合難しい
4	瓢箪池	3 4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	水の表現に注意、青くはない、樹木の變化、質感に注意、水へのかけ、四季
3	茶店	3 4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	中学年は思想的、高学年は大きなところをつかめ
2	白旗宮	2 3 4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	樹間から、又鳥居をとほしてみる、みどり白の中にお宮の赤を生かせ
1	國寶館裏の倉	3 4 5 6 一 二	○	○	○	○	○	前景に木を入れる、倉の透視に注意、前の木は暗い倉は明るい



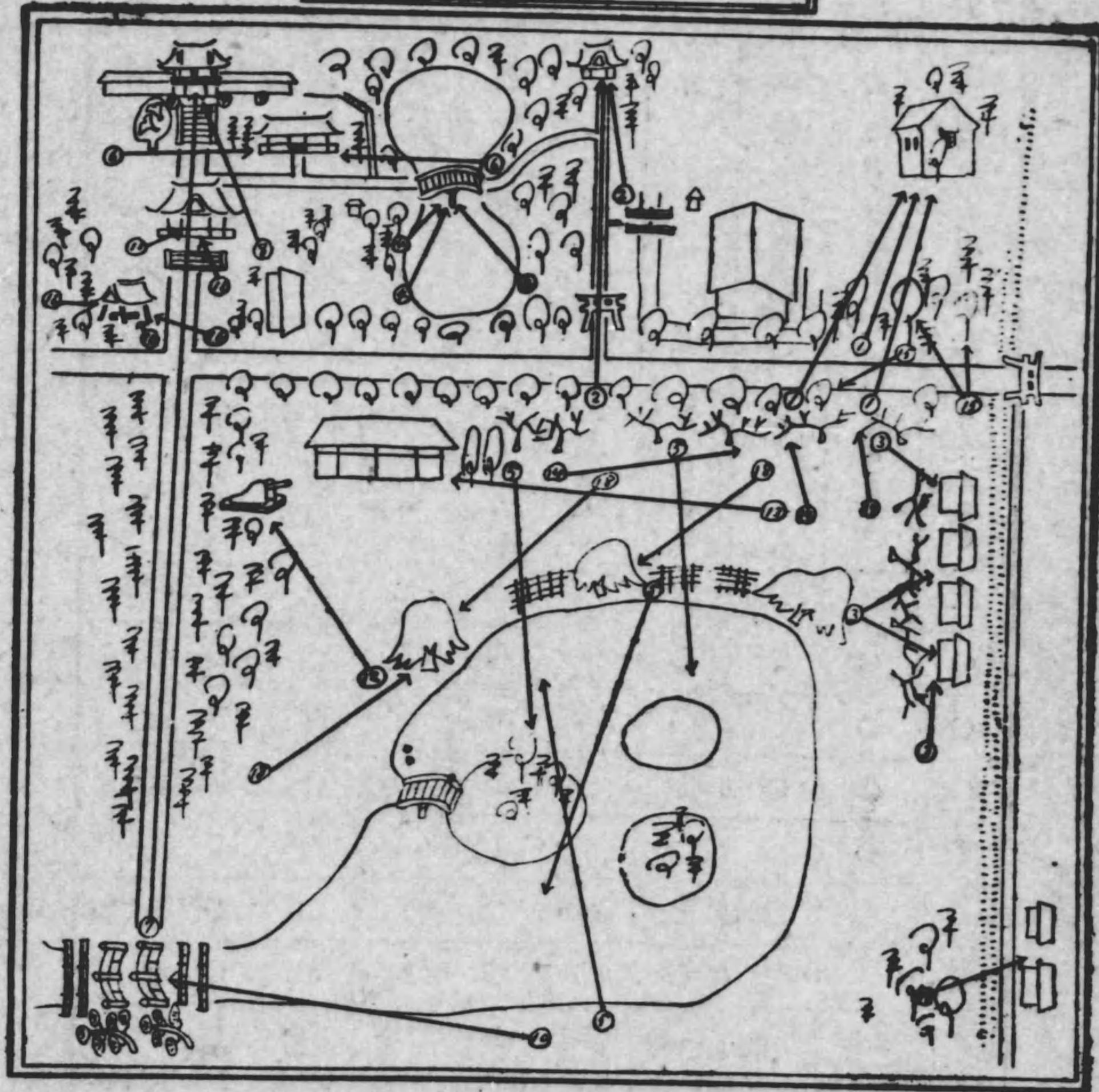
敬虔なる場ではなくてはならぬ。畫家のアトリエ然たる圖書室であつてはいけない。面積・採光・壁面等充分考慮され

なければならぬ。その理想的施設は望んで得られないが現在のものを最もよく生かすべく努力すべきである。圖書室・工作室はその位置も、圖の如きものがよいのではあるまいか。

- (1) 圖書室・工作室・鑑賞室(準備室相互連絡がほしい)——圖書室は暗室装置 2机・腰掛 教卓・黑板・掲示板・モデル臺・其他備品(詳細な説明の餘裕がない)——圖書室 (3) 陳列幕・額縁・鑑賞作品その他——鑑賞室 (4) 研究用机と腰掛・準備卓・書架・寫生材料・参考品・掛圖・戸棚・その他——準備室 (5) 鑑賞資料——作品・複製品・彫刻・工藝品等 (6) 實物幻燈 (7) 参考圖書 (8) 展覽會施設 (9) 積木 (10) 形態・色彩の説明圖 (11) 附屬花壇 (12) 各種系統案・調査・記録
- 具體的一例として次に「八幡宮寫生地一覽表」を示す。學校内は勿論學校附近も練成の場として常に調査されてゐなければならぬ。

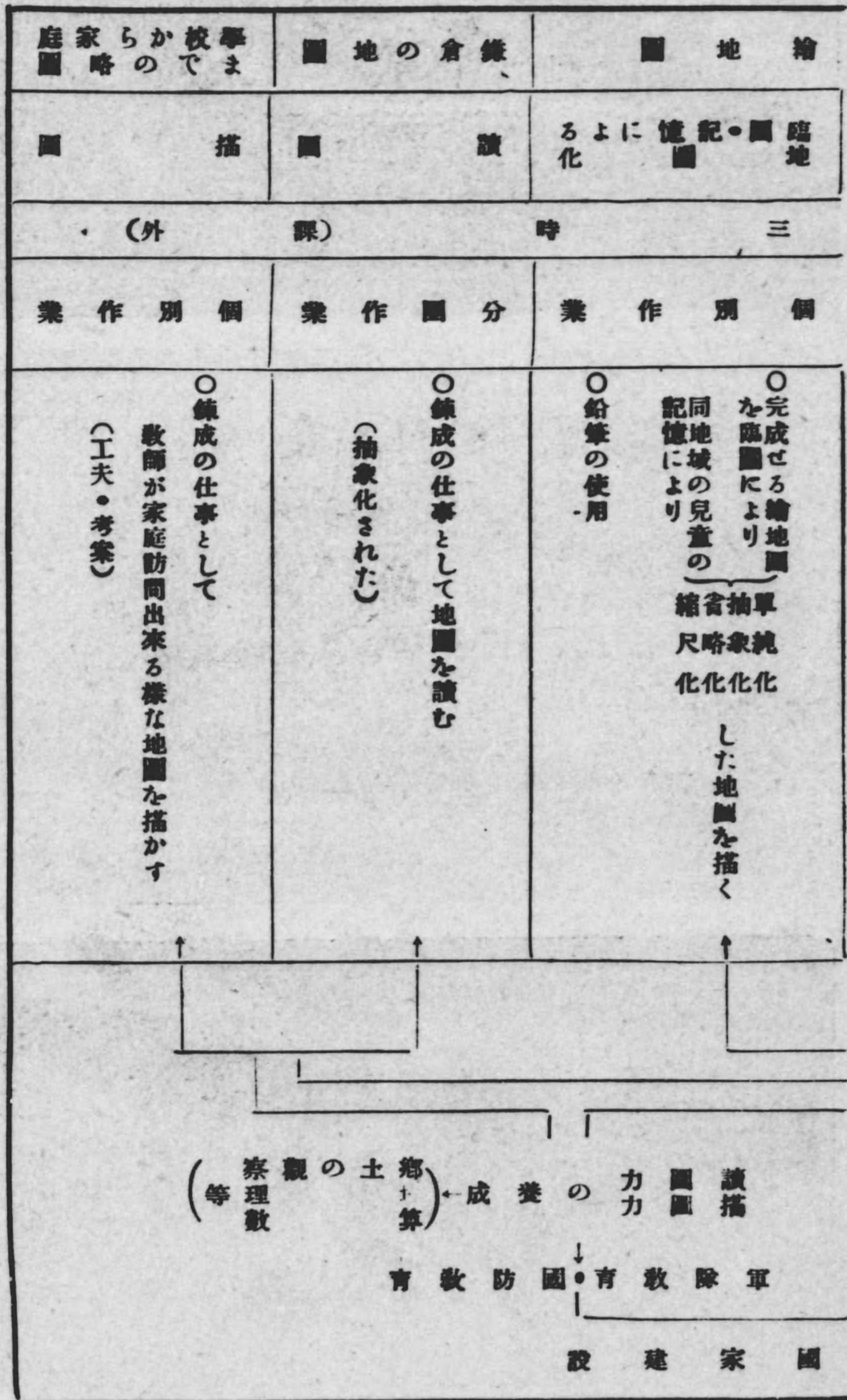
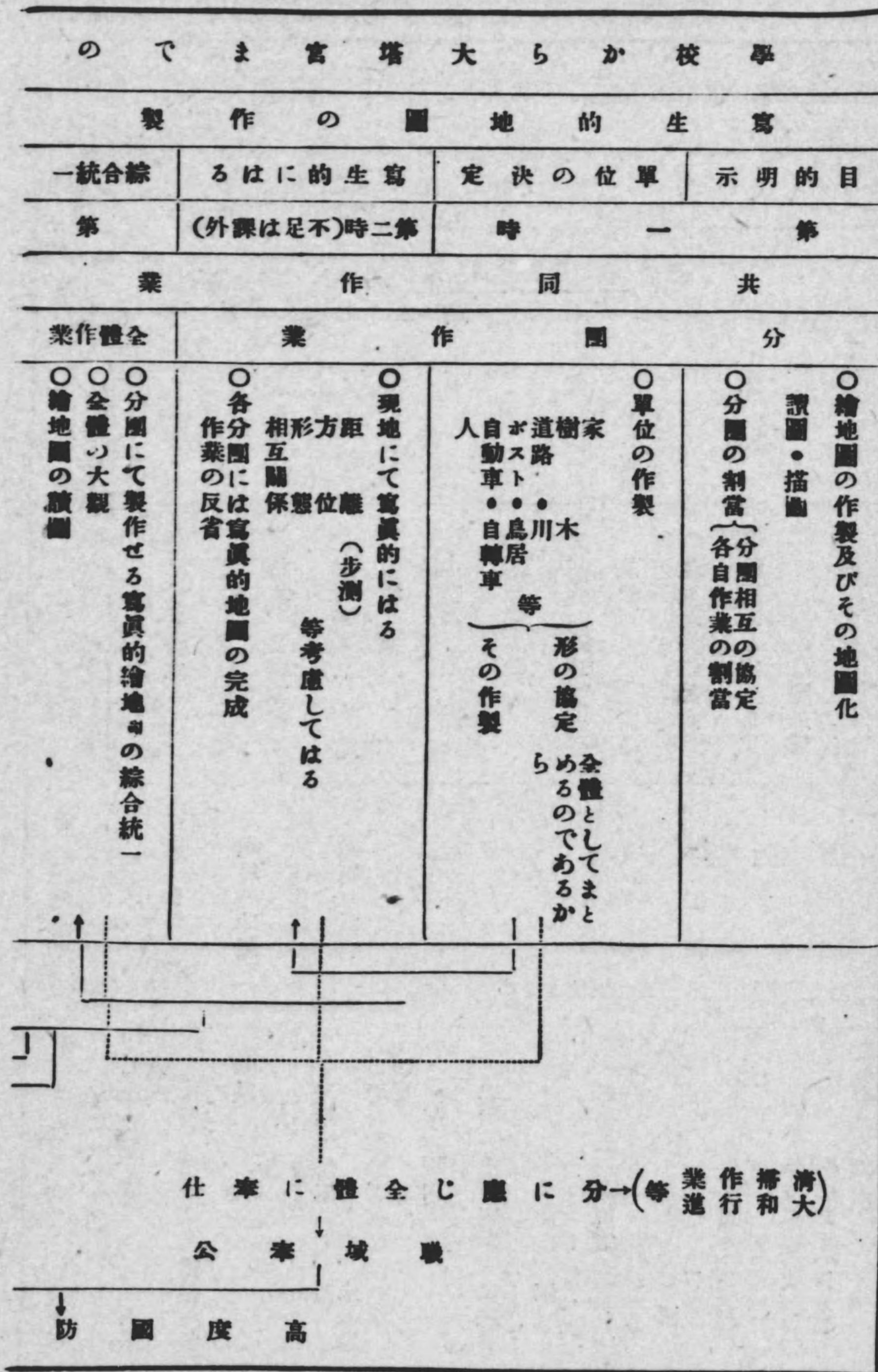
つ	ち	五	題目
(外課に外) 扱間時三			時間
設建家國防國度高 共同作業 一職域奉公 描圖力の養成 讀圖力の養成			實施
○單位の決定 形態の單純化(家 樹木、自動車等) ○寫生的貼付 歩測、縮尺 ○分圖のもの、綜合 ○繪地圖の讀圖 ○描圖(繪地圖の抽 象化) ○鎌倉地圖の讀圖 ○學校から家庭まで の地圖の描圖(發 展として)			相成
○教師 鎌倉の地圖 共同作業に 必要な材料 ○兒童 圖工箱			準備
目科及科教			統合
○國民科 二年 二十人の雜儀を教 讀 卷一 ハコニハ 一年 卷二 山ノ上 三年 卷五 七、道ノ足 十五、水の旗 ●算數科 一年 下四 (P.78-79) 二年 上門から教室ま 下 (P.39) 三年 上 身長の測定と 下 メートル(P.77) 三角定木(P.6) オ 宮(P.11) イロ(ナ四圖 (P.50) 歩ク速サ(P.82) 下方位(P.11) 學校の圖畫(P.23) 學校まで(P.30) ○○郷土の觀察 作			合

八幡宮境内寫生地畧圖



2、教科の統合と科目の聯關
 日の丸の旗を描かせたから修身
 との統合が出来たと考へ、箱を
 造りそれを裝飾したから工作と
 の統合が出来たと考へる様な表
 面的單純な考へ方に留めず、教
 材の本質に觸れ兒童の心性に則
 つた内面的な具體的な計畫のも
 とに統合聯關がなされなければ
 ならぬ。しかも綿密な調査と研
 究の末の立案でなくてはならな
 い。かゝる準備のもとに場の展
 開が行はれるのである。
 教科の統合・科目の聯關に於
 いて圖書並びに工作の地位は、
 眞の理解は表現といふ形式を通

あちづの取扱ひの概要を表示すれば次の如くである。



寫眞(10)は作業中の兒童
寫眞(11)(12)は完成せるあちづの一部

初等科二年學年

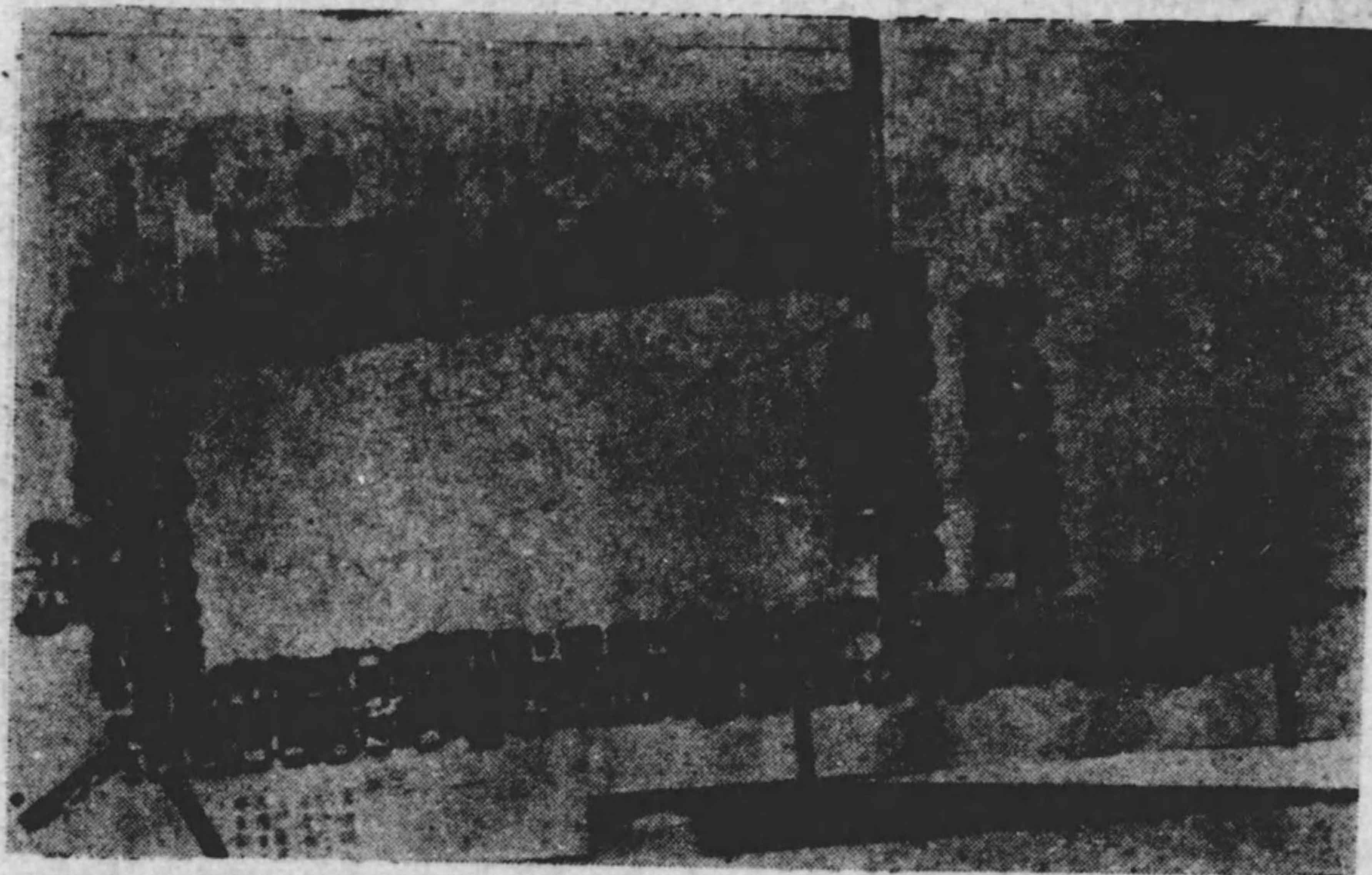
紙芝居 一寸ボウシ		題目
二時		時間
現 連續物語の繪畫的表現 協同作業		實 績
○物語の具象化 ○人物の指導 一寸ボウシ オ オヒメサマ トノサマ オアイサン オバアサン ○話方練習 ○聴き方練習 ○伴奏の音楽 ○唱歌一寸ボウシ ○自分の描く一場面 が全體の一つ		相 形
○教師 舞 臺 著 音 器 レ コ ー ド 掛 圖 ○兒童 クレヨン クレパス 讀 本		準 備
事 行	目 科 及 科 教	統 合
	國民科國語 卷三 一寸ボウシ 話 方 聴 方 讀 方 藝 能 科 音 樂	

して始めてなされるのであると考へる時、重要性を持つて来る。依つて圖書工作はあらゆる面に多角的に取上げられ統合し他と相俟つて表現的實踐的行を通して兒童の國民科練成にくひ入つて行くのである。

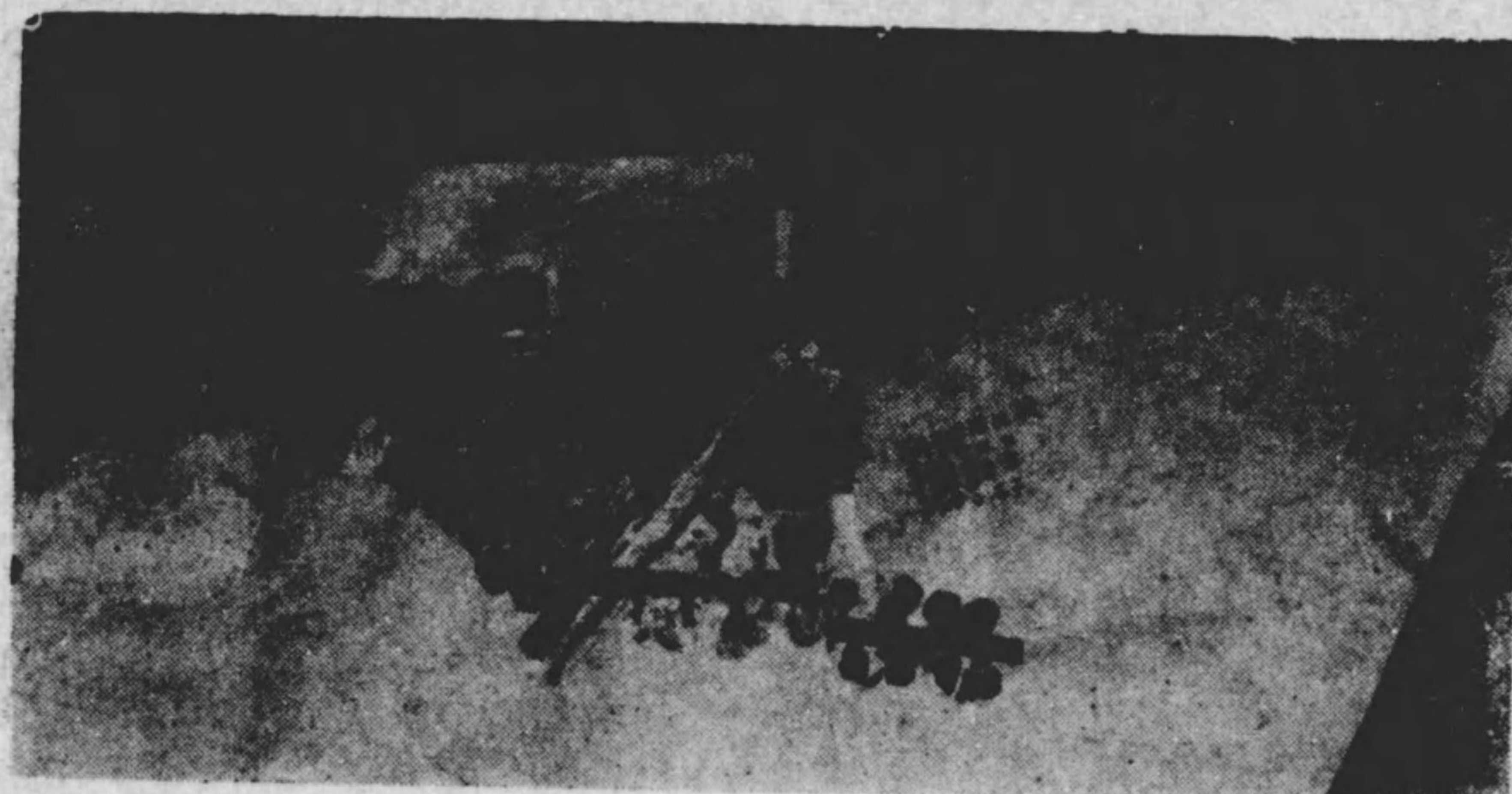
實際例二



10、作業中の兒童(第三時)



11、まじりの一節



12、まじりの一節

(1) まちづ (2) 紙芝居一寸ペウシ

四二二

3、園工自修會 報國組織に於ける自修會にして兒童の性を充分發揮させ自發的學習態度の養成に努めしめる。
——(報國園の項参照)

二、場の動機

1、生活の錬成 臣道實踐を基底において生活の型成に當る以上その教材内容も之と密接な關聯を持ち之に出發して之に終局をおかなければならない。低學年に於いては思想畫を通して具體的生活指導をなし、中高學年に至つてはこれに加ふるに生活全面にわたつて—花を一本さすのに、机上に本を一冊おくのに、室内裝飾に、服飾に、學校美化に—一切の身の廻りに就いて錬成された美的構成や美的配合や工夫考案力や創造力が生きて來なければならぬ。しかも一切が皇國民錬成の一途に歸するのである。

具體的實施事項の實驗的結果について實例を挙げれば

○日曜圖書——實施以來一年半に及ぶ。

ブロックの表紙には「日えうづくわ」と書かれてゐる。表紙裏面に

○日えう日に見たこと、聞いたこと、したことをゑにかきませう。

○ねづみ色で形をとり、色をぬつて、それから黒で形をとりませう。

○ていねいに白い所のないやうにぬりませう。

○うらへ月日とお話をかきませう。

○土えう日に持つてかへつて水えう日にかならず出ませう。——二年の時のもの——

かくして水曜日晝食後批評鑑賞を——時々教師中心に、時に兒童中心に——行ふ。兒童は日曜日の生活をそのまゝ繪にし文にして來る。内容はきはめて多方面にわたる。

○おとなりのふとんかけで鐵棒をした。

○お父様と朝島へ行つて野菜を見た。

○お母様のお掃除のお手傳をした。

○お母様が髪を切つて下さつた。

○金魚におかゝをやつた。

○おふろに入つたらねこが居たのでつまみ出した。

○日時計でかけの長さを測つた。

○お父様が天皇陛下の御前で弓をおひきになるので私も一生懸命おけいこをした。

○〇〇さんのところへ桑の葉をもらひに行つた。

○かにとりに行つた。

○おぢいさんの法事で東京へお寺参りに行き今お經をあげてゐます。

○成田山へお参りに行つた。池に澤山の龜がゐた。それを見てゐる所。

○今日からかやをつつてうれしく入つて騒いでおかあ様に叱られた。

以上は或週の一部兒童の内容である。なかなか多方面にわたつてゐる。その内容をとほして學校外の兒童の生活を知り、これにより皇國民としての生活型成の基礎的指導がなされる。

特に兒童の物に對する見方が鋭くなり、綴方の題材が豊富になり、内容に變化を持つ表現がらくになつて來たのを見た。

例「おうちの向かふのお魚屋さんのものほしにこのころでんしよばとがかつてあります。今赤い旗をふつて呼んでゐます。豆のくわんをふつたり、口ぶえをふいたりして呼んでもまだよくなれてゐません」——二年の三學期——
依頼心が無くなり自己の力で表現する態度が出來た。又他教科の學習を助ける。教師には家庭の狀況が理解出來、學級經營上非常に参考になる。

○「子供となりぐみ」「のびる子供」

兒童の發案で實施。名稱も兒童のつけたもの、學級兒童を二分し毎月編輯して各家庭に廻覽する。書用紙の大きさは四ツ切。内容は兒童の創作・工夫・考案になるもので圖書を中心におはなし、理科の研究、詩、俳句、墨繪、漫畫日記、考へもの等豊富である。教師にも一頁が與へられる。編輯も兒童中心の共同作業であり、あらゆる教科・科目と聯關して多方面にわたり兒童生活全般にわたつて指導することが出来る。

2、共同作業に對する練成 個性の伸長に留意すると個人主義的になり、競争意識をそゝる學習態度になり易い。これは警戒すべきであり、個性を發揮しつゝ全體に奉仕するの態度が必要である。即ち分に應じ全體に奉仕するの精神を養ひ一致協力同じ目的に向つて努力させる。かゝる共同的訓練は圖書工作に於いて精神的にも作業的にもその練

成的部面は廣い。これが集團作業（清掃作業・農耕作業等）集團訓練（大和行進・神社行進・報國團等）に伸び、職域奉公・職能奉公の國家奉仕と發展する基礎的練成になり、皇運を扶翼し奉る國民の素質を啓培することとなる。
具體的實例二三を挙げれば

○旗行列（二千六百年奉祝） 各人旗を持つた人物を描現し、服装は色紙包装紙等廢物利用によつて貼付し、これを切抜き案地には八幡宮のかゝれた大きな臺紙へはつて行く。先生もはる。そこに旗行列が出來て萬歳の歡聲が起る。個人では出來ない大きな仕事が行はれる。日の丸の旗を中心に教師兒童そろつて八幡様の御前で二千六百年を奉祝し一億一心時艱克服に邁進する氣持が小さな胸に躍つて來る。

○双六——低學年 讀方で學習したモモトラウ、サルトカニ、コブトリ、アソビ……等双方共同で製作する。計畫内容的考慮、繪畫的表現等がなされ、完成後は遊びの指導と多方面にわたつて聯關がある。

○かるた 特に現行一年兒童の片假名より平假名に入る指導としては是非取入れたい。讀札・取札に綴方、算數、讀方、修身と聯關し製作とともに共同訓練が出来る。

○「まちづ」前項参照

3、躰・姿勢の練成 劍道に於いて正眼に構へる。その構が出來た時心が定まる。形の構へが心を培ひ、心の構へが出來た時身體の構へが取れる。形から出て心に至り、心から入つて形に出る。これは同時的のものである。この構へから劍道が生れる。弓を射るにも構が出來なければ的中しない、藝道に於いても同様である。躰は兒童中心主義、兒童心理主義的立場から言ふとあはぬ様であるが古來から日本獨特な教育の方向である。これが復活されたと見てよ

い。身體を美しくこなす、身體の動きを藝術的に運ぶこと、そこに人間の身體的活動を生活を美的に修練していくことが出来る。「たしなみ」といふ言葉があるがかうした點、圖書の時間など大いに力を用ひねばならぬ。繪が美しく書けても生活の鍊成面にはあらはれねばならぬ。圖書教育もそこまで行かねばならぬ。生理的、健康的衛生的立場から見た姿勢ばかりを指すのではない。

4、物(用具・材料)に對する鍊成。「用具材料ニ就キ適切ナル指導ヲナスコト」とあるが、日本藝道に於いてこれを「道の具現」とみてゐる。そこに「道具」といふものが存する。刀は武士の魂である。銃は女子の魂であり婦道の具現である。刀鎗は武士の魂の鎗であり、銃のくもりは婦道のくもりである。かゝる意味を持つ用具・材料である。この意味で用具・材料の尊重は日本藝道修練に通ずる。故に用具の取扱方、準備、後始末、清潔、整頓等類とし又道の修練として扱つて行かなければならない。材料も時節柄物資愛護廢物利用等注意して扱はなければならぬ。

藝能科工作

I 藝能科工作目的觀

在來の手工がその教育的價值を充分に持つてゐながら義務教育の教科でなかつたことは、先づ第一に革新を要望されてゐたのであつた。唯物を作らしめることに忙しき手工教育の現状が、果して人間を作る方法に最善であるかどうか

か。其の他設備材料等の問題も常に反省されてゐた。今回その内容や名稱には種々曲折があつたけれども、皇民鍊成の一分野に藝能科工作と改稱され必須科目として再出發したのである。藝能科工作の趣旨は端的に言へば皇國の道の修練として造形的なる創造性の育成にある。國民學校の本旨、藝能科の要旨、藝能科工作の目的を併せ考へ、從來の小學校手工要旨と比較考察することによつて、工作の目標を一層鮮明にしてみたい。

技術文化の昂揚。小學校手工の要旨に「物品ヲ製作スルノ能ヲ得シメ」とあるのに對して、藝能科工作に於ける「物品ノ製作ニ關スル普通ノ知識技能ヲ得シメ」とあるのは工作教育の方向を具體的に示してをるものと思ふ。即ち造形知識の涵養と技術性の修練は藝能科工作の進むべき大道である。物品とは廣く造形的なものを意味し美術工藝工業等の廣い國民生活の分野に亘つてゐるのであるから、そこには科學の世界があり藝術の世界があり、豊かな近代知性の陶冶がある。國民情操の醇化及び國民生活充實の所以も亦こゝにある。こゝに言ふ技術は單に表現法を意味するものでもなければ、個人的修徳に重きを置くものでもない。廣い實物に即した企劃力表現力を意味するものであつて、次代國民に新しい日本文化建設の素地を培ふものである。

科學性修練の重視。國民學校に於ける基礎教養は單に慣習的な趣味細工であつてはならぬ。手の工を思はせる手工が機械の工を併せて工作と改稱され、目的の中にも機械の常識を養ふことが明示されてゐることは、單に國防上のみならず産業立國上にも頗る重要な事である。藝能科工作としての最大な内容の革新はこゝにあるとも言へる。工業の趣味を長ずと言ふ漠然とした小學校手工の趣旨が在來如何にして實現されてゐたかを思ふと寒心に堪えないものがある。機械器具の分解組立運轉等の修練によつて、技術はもつと科學的に常にその斬新さを持続し發展していかなけ

ればならないと思ふ。

創造性の修練。勤勞を好み實踐力のある國民鍊成の必要は申すまでもないが、國民教育として創作的態度の涵養も大切なことである。國民の創造力の伸展は、生活の改造合理化、美術工藝の進歩、産業の發達、延いては國力の充實國運の隆昌を期することが出来る。國民學校では教育全般に亘つて特に此の點を重視し、國民造形文化の創造を希求して止まないものである。

以上簡単に藝能科工作の重點を述べたのであるが、藝能科中の工作である以上藝術的情操的陶冶の重視も亦當然のことである。又皇國の道に歸一して眞に皇運を扶翼し奉る國民を鍊成することが國民學校の根本理念であるから、こゝに中心目標のあることを忘れず、他教科並に他の科目と密接なる關係を確保しつゝ、工作独自の使命を果さなければならぬ。

Ⅰ 藝能科工作の教材

一、工作教材に對する考へ方

従來工作教材を分類する場合、材料による分類、陶冶價值による分類、造形資料による分類等その觀方に依つて區區であつた。材料に依る紙細工とか粘土細工とかの考へ方が、技術のみの教育の如く思はれて、ともすると眞の意義が誤解され勝であつた。國民學校の教材として文部省が示した中にも、材料名が列記されてゐるけれども、これは指導技術上の分類を示すものであつて、勿論紙や粘土の一材料だけで一時間を終せよとか、或物品を完成させよとか

言ふ狭い意味のものではない。工作教育が國民生活に必要な文化財を對象として考へられる以上、當然そこには多種多様な材料技法が必要となつてくる。例へば飛行機を製作するのに檜材、ヒゴ竹、ニウム管、金具、鐵線、ゴム、プロペラ材等を用ひるのであるが、隨つて是に應じた種々の工具工法が必要となつてくるのである。然しこの様に多くの材料を用ひて物品を製作する場合には、製作することそのみにとらはれて、その過程に於ける教育的なものを閑却しやすい恨がある。材料主義の分類にとらはれてはならぬが、工作独自の使命である技術の修練や、實際指導上の問題、特に教材の選擇配列及び材料用具の準備等の問題を考察する時に、この方面からの觀方も是非共なされなければならぬと思ふ。我々は教材に對して、此の材料を中心とする技術上の指導發展系統を充分研究すると共に、指導目標の本義に立脚して、あらゆる方面より深い教育的意義を理解把握してをらねばならない。

二、工作教材選擇の基準

1、兒童の心理的生理的技術的發達に即した教材 教育の對象が兒童であるから、その教材が如何に有意義であつても、全々興味のないものでは効果はあり得ない。又工作は身體を動かす教科であるから、作るもの、材料、工具が心身及技術の發達過程に即し、男女の特性に適合するものでなければならぬ。玩具的趣味的動的實用的行事的等の教材は一般に喜ばれるものである。

2、郷土的生活的季節的行事的教材 兒童の現實の生活内容から芽生えた教材を採ることは、實生活の向上と言ふ意味から意義がある。將來の實生活に役立つと言ふことも大切である。地方的事情により極端に走らぬ程度に、土地の材料を用ひ、題材をその土地より選ぶと言ふ態度が欲しい。季節的行事的と言ふのは、例へば粘土工の様な教材は

暖い時がよし、三月の節句の頃には雛祭と言ふ題材で學習させるが如きである。

3、時代の日本的教材 物資統制、資源愛護の問題、國民精神作興の問題、科學工業振興等の國策に順應し、時代の進運に即應する新しい型の人間を養成し得る教材である。廢物利用の教材や機械器具の取扱に關するものは、國策的な意味を多分に持つてゐる。工作に於ても日本精神を體得し、日本固有の生活文化を根幹として發展せしむべきは言ふまでもない。家庭社會の行事、儀式祭禮社寺等に關する教材を採ることは意義がある。

4、技術的科學的教材 小刀の使い方、研ぎ方、保存法とか、釘の打ち方、伸し方と言つた日常生活上の技術の修練は、更に科學的に發展して機械の取扱に慣れさせ、精密機械や科學兵器を製作し得る技術的基礎づけにまで至らなければならぬ。飛行機、グライダー、軍艦、防毒マスク、防空壕防空電燈カバー等の國防に對する直接的な教材には、技術的科學的なものが多い。

5、藝術的情操的教材 我民族は古來藝術的天分に富み、偉大なる藝術文化を創造してきたが、この長所を助長啓培することは重要な事項である。適宜美術品工藝品の鑑賞をなさしめると共に、工業工藝作品に就いてはその知識機能に關して理會せしむる様指導すべきである。意志と知性と技術性を内容に持ち、情操を醇化し得る教材は重要である。

6、實用的創造的教材 兒童は將來職業生活を營み職業を通して御奉公するものであり、又國家將來の發展を想ふ時に實用的創造的教材の重要なことは論を俟たぬ。高學年に於ては理科で得た原理を以て機械器具を創作させるとかセメント木工の技法を應用して校舎校具の破損箇所を工夫修理せしめるとか、女子であるならば臺所の改善室内の

整頓裝飾等の着眼點を明にして各自の家庭に應じた方法を工夫考案させ實踐させることは意義がある。

三、材料の基礎的研究

藝能科工作の材料は紙、糸、布、粘土、セメント、竹、木、金屬等で此の材料を選択するには次のことに留意しなければならぬ。廢材の利用、兒童の生活材料、安價で多量得られること、兒童の心理及體力に適合するもの、危険でないもの等の條件が考慮される。随つて實際取材せられる材料の範圍は、或程度縮小される。然し必要と可能に應じ隨時隨所に総合的な材料の使用が教育的意義ありとせられる時に、材料に對する指導は特に重んじなければならぬと思ふ。

教則案の目的に「物品製作ニ關スル普通ノ知識技能」とあるが、物を作る上に於て材料に關する知識、使用法、處理法、基礎的工法の指導は工作の本質的部面である。特に材料の品質、性能、效果、耐久力、經濟價等を理解することとは物品製作の基礎であり出發點である。單なる製作の技巧でなしに、質から来る合理性に立脚して、根本的に工作法上の技術を體驗させるのでなくては、應用性發展性のある生きた力とはならぬ。二三の例を擧げて説明して見たいと思ふ。

中葉紙や薄紙に例をとるならば、光澤、色彩、質感、質の粗精、縦目横目、耐久力を先づ考察研究して、さて圓く使用するには、立たせるには、彩装には、目貼紙には如何に使用したら最效果的であるかと言ふことになり、又その表現法には紙の質が斯くあるから、ちぎり工法に依るとか、小刀に依るとか、又接合材は糊か糸か膠か、と言つた問題も自然に解決してくる。

竹工があるならば竹の性質を充分研究することに依つて、竹の内部が空虚、節がある、質が柔軟性弾力性彎曲性に富む、縦に割れ易く薄葉的に剥ぎ易い。等の竹の特質は兒童にも容易に氣のつくことである。此の根本的な特質に立脚して竹の利用法が工夫考案され製作物が決定する。即ち或物を製作するに如何に竹を利用したらば最合理的効果的であるかを考へられる。板状、棒状、角状、環状或は節を利用する等の場合が生じて來、工具の範圍や技法も決定して、理論的、有意的に作業が發展し得るのである。

一枚の板をとつて板目であるか柾目であるかを考へる時に、その板の將來の收縮、彎曲、割れ方等を豫想することが出来、更に節の有無、木裏、木表、乾燥の程度を考察する時に、美田に立脚した木と工法が生れる、如何なる物品を作るにも此の基礎的態度が基になるので、此の觀方が身についた時に工作に對する眞の態度が鍊成されたものと言へよう。

今後廢材を利用する場合が多いと思ふが、包裝紙を利用する様な時には、その質、折目、模様、汚れ、裏表、大きさ等實物に即して研究させ、模様等は積極的に活用する様に考へたい。

材料が紙にせよ竹にせよ木にせよ廢材にせよ、材料そのもの、基礎的研究を缺いては、眞の工作教育はあり得ない

四、機械器具の取扱に對する態度

國家が國運發展のため國民教育に要求してゐる内容には技術國民としての水準の向上を期待してゐる點が大きい。精密機械や化學兵器が何時までも外國の助力を仰がねばならぬと言ふことでは東亞指導の任にある國民として恥ぢなければならぬ。機械器具の操作分解組立修理を加へたのは、時代の進展に伴ひ國策に順應するためである。自轉車

の運轉が國民の常識である様に、機械器具の分解結合も漸く理解する程度に留まらず、これが生活の常識となるまでに至らなければ意味をなさぬ。それには體験的に取扱はれなければならない。高學年では兒童に機械生活をさせ得る様な指導がされないと、眞に實力の養成にまで至らない。

次に教材の問題が當然起つてくるが、最初は我々の日常生活の領域にある物を使用し、次第に程度の高い物とすることが肝要で、全々機械の設備がない所では、最少限度の設備をすべきである。一例を挙げれば、鋏、鉛筆削、電氣のソケット、防毒マスク、理科實驗具、竹挽鋸、糸鋸機、研磨機、萬力等より高學年では自轉車、オートバイ、リヤカー、模型飛行機、發動機、農材であるならば、脱穀機其他農耕具等を適宜取材するがよい。小さい器具等は多く準備してないと全部の兒童に分解を體験させることは困難であり、教授の効果や能率を擧げることが出来ないから、平素心掛けて多く蒐集しておきたい。教授上注意すべき諸點を擧げてみる。(1)構造上よりくる理論に従ひ、部分的なものから次第に中心的なものに向ひ科學的方法に依つて行ふべきである。自轉車と言ふならば、ベル、ペダル、ブレーキ、荷物掛等の部分的なもの、分解から始め、漸次前車輪、後車輪に及ぶのである。(2)科學的態度、緻密な觀察力正確な能力の養成に着眼しなければならぬ。(3)規律訓練を重んじ粗雑で亂暴な態度は最も戒しむべきである。(4)用具の取扱及整理に注意し、部分品を失つて組立に困難を來すことのない様にする。(5)共同學習となることが多いので教育的な指導法が研究されなければならぬ。(6)教材の難易と必要とに應じてではあるが出来るだけ圖解の準備が欲しい。(7)試運轉の出来るものは必ず行ひ、その組立の状態を檢査しなければならぬ。(8)指導の過程としては、構造上の全體的な理解、分解順序及方法、結合順序及方法、實施上の注意、實施、運轉、工具の整理、手洗、等となるであらう。

以上は極大體の考察であるが、なほ各學年の組織的系統的な教材配當と、これに伴ふ出来るだけの設備をすることが大きな問題である。

五、新教材としてのセメント教材

國民學校の實現に當つて、手工が工作となり根本的な改革のされたことは既に述べた所であるが、内容の進歩した點と言へばセメント工の出現であらう。

國民學校に於ては教育を國民の生活に即して具體的實踐的ならしめること及高學年では、將來の職業生活に對して適切なる指導を行ふことを方針としてゐる。此の觀點に立つて我々周囲を見渡す時にセメント材の工作物は驚く程の領域をもつてゐる。一步道を歩けば道路と言ひ、建築と言ひ、橋梁と言ひ、溝渠と言ひ凡そ構築のある所セメントのない所はない。都市に於ても農村に於ても交通上産業上國防上に於ても、家庭生活其の他日常の生活に於ても、神社佛閣等の美術器の製作に於ても、セメント工法の應用に依る造形物は無數である。斯くセメントは我々の生活と密接不離の關係にあり、現代文化の一大要素であると言つても過言でない。近代文化の所産であり、且つ非常に勝れた文化材料であるセメントを、從來粘土教材の延長發展として採擇してゐた所も相當にあつたことは勿論であるが、極めて少なかつたことは寧ろ不思議で、新しい改革案の教材として擡頭したことは當然である。現代及將來の國民生活上不可分の關係にあるセメント工教育の研究こそ現下の急務である。

1、セメント工の指導精神 セメント教材の目的は藝能科工作の目的に示された如く、單なるセメントの理論や施行方法技術等を教へるのではなく、物品の製作に關する普通の知識技能を得しめ、國民生活の充實を企圖する上から

の主要教材として教育的に處理する所に意義がある。勿論セメント自身の持つ科學性多様性表現の自由性、等の諸性質に立脚しての基礎的技術の修練も工作教育の本質的部面として重要であるが、單に造らせることそれ自體が目的ではなく造らせることは一つの手段である。セメントと言ふ國産材料を通して、構成される造形全般に對する基礎的陶冶をなし、以て國民生活全般の擴充を圖るにある。セメント作品が上手に作れることは勿論大切であるが同時に身邊を圍繞するセメント造形物に對しても、其の形狀構造意匠等に對しそれらを鑑賞し製作し活用し得る實力を養成し、關連日本の基礎教育としての意義を十分發揚させなければならぬ。従つて教材の採り方やその範圍に就いても、又材料の取扱に關する研究についても、實用的、美的、生活的郷土的、季節的、時代的、國民的、國防的等あらゆる角度から検討しなければならぬ。又指導要領の如きも郷土生活を重んじ、社會機構の中に織り込まれたセメント工として、調査、構案、製作、活用、鑑賞の指導過程を辿らせることが必要である。斯くして造形、創造、國民等の教育目的を徹底させなければならぬ。

2、セメントの特質

- (イ)實用性 耐火、耐震、耐水、耐弾、防毒的にして他の何れにも勝る特色をもつてゐる。
- (ロ)美術性 美の材料として彫塑工藝の各方面に用ひられてゐる。
- (ハ)表現の自由性 始めは軟材であるから充填、塗着、貼着、彫塑等の技法により自由に工作し得るが、時間が立てば硬材として堅牢性を發揮する。

(ニ)多様性 純セメント、モルタル、コンクリートとして使用するのみならず、金、木、竹、粘土等の他の材料と

組合して頗る多様の工作が可能である。

(ホ) 實生活性 處理が簡單、取扱が便利堅牢であるから他の何れの工作品よりも國民の實生活に活用される。
(ヘ) 科學性 一見泥土のやうに見えるが近代文化の純學的産物であるから化學的修練の材料としては好適である。
(ト) 其他 設備と工具の僅小、衛生上無害、堅牢度大、取扱便利等

3. 基礎的工法 材料上より見る時は、セメントのみを用ひるセメントペースト工、セメントと砂とを用ひるモルタル工、セメント砂と砂利とを用ひるコンクリート工、更に鐵筋を挿入する鐵筋コンクリート工、竹筋を挿入する竹筋コンクリート工、鐵網を挿入する鐵網コンクリート工となる。技法上より見る時は充填工作、彫塑工作、塗着工作、貼着工作等に分けられる。技法上より見たる工法とその應用について次に述べる。

(イ) 充填法 板、原紙、粘土、板金等で適當な型枠を作り、これにセメントペースト、モルタル又はコンクリートを充填して成形する方法である。充填する場合には搗棒で搗固めて形成するのが普通である。とに角型枠に充填するのであるから型枠を粘土型、石膏型セメント型、土型、自然型等種々工夫する事によつて様々な物品が造られる。砥石、敷石、文鎖、縁石、建物の基礎、花壇縁、流し、洗面所、瓦、スレート、コンクリート管等無數に製作し得る。
(ロ) 塗着工法 鐵筋、竹筋、鐵鋼其他にセメントペースト、モルタル、コンクリート等を塗着することによつて工作する方法である。最初から順に塗り加へて仕上げる場合もあれば、豫めコンクリートで基礎體を打ち、其の上塗仕上げを行ふ場合もある。鉢、花瓶、棚等の小さい器物の製作から、橋梁、鋪道、建物等迄に應用される。
(ハ) 貼着法 セメントの接着性を利用して小石石材、貝殻、色硝子、タイルをコンクリートの壁面に貼着したり、

又セメントとセメント、セメントと金屬、セメントと木材等を接着させる方法である。貼合花瓶、貼合筆立等は一例である。

(ニ) 彫塑法 セメントを捏ねて型を用ひず各種の製作を行ひ、又セメントペースト、モルタル、コンクリート等のプロツに彫像を施すことによつて工作する技術を言ふ。木彫や石彫と異なる所は彫り取るばかりでなく、突き出た所浮き上つた所にはセメントを添加して盛り上げられるから一般の彫刻よりも廣範圍に亙るものである。門札、セメント版畫、灰皿、煙草セツト等は一例である。

(参考書) セメント工藝二三號・セメント工 矢崎好幸著

セメント工備品

練臺(一組ニツキ二箇) 角形シャベル(一組ニツキ四箇) 鏝(一組ニツキ五箇) 鍬(左官鍬)(二人ニツキ一箇)
同中頸(二人ニツキ一箇) 木鍬(五人ニツキ一箇) 鍍板(五人ニツキ一箇) 針金ブラシ(十入ニツキ一箇) 刷毛
(五人ニツキ一箇) 洗帚(五人ニツキ一箇)

教育的意義より見たる工作指導上の問題

工作は物の教育であると言つてもよく、物資に對する認識を明確にし、その文化價値を兒童に知らせることが大切である。我々の具體的生活を考へる時に、周圍は總て物であり、此の物の恩恵に依つて生存し得るとも考へられる。物に對する敬虔感謝の氣持を養ひ、愛護節約の精神を培ひ、更に一枚の板を削るには板になりきつて削る眞剣な心持

にまで深めたい。これは物を創造化する日本藝道の奥義でもある。従來の手工では、工具の手入、整理整頓、材料の利用節約等に多大の問題を持つてゐるが、表面にあらはれた事柄のみにとらはれず、此の根本的態度を培ふことに着眼されなければならないのである。兒童が感恩の念を持った時に、作業終了後用具を原位置に返せと命令せずとも自らあるべき場所に納るものと思ふ。實際兒童は紙を無駄にするもので、低學年工作に於ては持つてゐる紙の半分以上が無駄にされてゐると言はれてゐる。かうした問題解決の鍵は根本的な精神的態度の確立にあるものと思ふ。工作は物の教育であると共に、作業を通しての教育である。作業化は教育の原理であり教育の常識である。作業を伴はない教育は教育の中でも比較的效果の薄いものとされてゐる。工作は作業を離れて存在しない。どこまでも作業を通して子供を活動的に導く所に尊いものがあるので、此の作業過程に技術の修練、情操の醇化が行はれ、勤勉、整頓、清潔等の良習慣が養はれるのである。工作指導上に於て注意しなければならぬことは技術の修練を重んじ、又個性的な性質を多分に持つてゐることで、やゝもすると個人主義的意識をそゝるが如き學習態度に陥り易いのである。適宜共同作業を課することに依り、個性を發揮しつゝ全體に奉仕するの態度、一致協力の問題を啓培しなければならぬ。

以上述べた精神を基とする具體的な問題、「廢物利用」と「共同作業」に就いてやゝ詳しく述べてみたい。

一、廢物利用の着眼點

科學性、技術性、創造性等に充分修練された實踐人の養成は時代の要望する所である。これには兒童に出来るだけ多くの材料工具を與へて造形生活を豊富にすることが好ましい。然し一方國家の統制經濟に基いての物資の不足と高

騰とは、實際家の最憚む所である。即ち國策に順應した材料を以て、如何にして國策に順應し得る人材を養成すべきかと言ふことになる。工作の教材として指示されてゐる材料の中で現在比較的安價で充分手に入るものは竹材位で、傘工材料の如きは到底求めることが出来ないし、セメントにしても、板材にしても、兒童各家庭の經濟狀態の差異を考慮する時に、教育的範圍に於ても充分得ることは困難である。こゝに當然材料の節約と、あるものを生かして使用する廢物利用の問題が生じてくる。

廢物の利用には二つの段階が考へられる。一つは消極的個人的意味に於けるもので、他は積極的社會的の廢物利用である。例へば、色紙の切抜で無駄が出来たからそれを捨てないで空箱の裝飾に利用すると言ふのは消極的な考へ方であり、もつと根本的に材料を合理的効果的に利用して、初めから無駄を出さぬ様に設計製作すると言ふのは積極的態度である。物を單なる物と思はず一つの生命體としての敬虔な氣持を養ふ時に、材料の節約や、工具の愛用等は注意せずとも出来ることと思ふ。學高年であるならば更に一步進めて、これを國家的社會的見地に立つ經濟的意義にまで進めなければならない。

廢物を工作教材として採用することになると、その範圍は各面より制肘を受けて随分と限定される。先づ作品が教育的科學的藝術的實用的等の目的に合致するものでなければならぬし、他方兒童の精神的技術的發達段階も考慮しなければならぬ。それに多數の兒童を對象として教室内で取扱ふのであるから、何處の家にもある一般的廢材であることが望ましい。然し時には全く自由蒐集させ、思ふまゝに構成させて、すばらしい思ひつきを體驗させることも發明發見の立却點として意義あるものと思ふ。平素目にふれる廢材の例として次の様なものが挙げられる。

イ、紙材 ポール紙箱類、包装紙、セロファン、古畫用紙、古雜誌、新聞紙、古葉書、廣告、キヤラメル箱、煙草の箱。

ロ、竹材 古傘、箒の柄、筆の柄

ハ、木材 各種板材の空箱（蜜柑箱、石油箱）割箸、破損玩具、マツチ棒

ニ、金材 各種空罐、各種板金の屑、古針金、古釘、玩具の彈條

ホ、糸布材 糸屑、毛糸屑、小布片、各種包装用紐

ヘ、その他 貝殻、空ビン、輪ゴム、藁、麥桿、マツチ箱

廢物蒐集の方法として先づ大事なことは、その動機を構成させることである。廣い生活環境の中から有効な材料を發見し得る能力を練つておき、自發的に集める様にまでなりたい。最初は利用の目的を明にしておき、それに適するものを集めさせて利用法を體驗させるのがよい。進んでは廢物入箱を用意して置き、適當なものがあれば機會ある毎に捨てないで採つておく様にさせたい。蒐集に就いて注意することは、集めた物は必ず何等かの方法にて利用させて喜びを味はせることが大事で、廢品のために常に部屋が穢くなると言ふことのない様にしたい。兒童は充分使用し得る物を無理に廢物として持つてくることがあるから、此の點にも細心の注意が必要である。

二、共同作業の考察

共同作業は團體訓練に依りて、社會精神を修得させることに意義がある。次に述べる數項には特に留意したいと思ふ。(1)團體訓練に依る共同一致、協力互助の精神を養ふ。(2)義務を重んじ責任感を強固にする。(3)國民としての忠實

服業勤儉治産の素地を培ふ。(4)作業の能率を増進時間を節約する。(5)實際生活の準備となる。共同作業に於ける短所としては、(1)知識技能の確得を妨げる。(2)群衆心理に従つて行動し又依頼心を助長させる。(3)作業の方法並に成績が平均化する等の短所を擧げることが出来るが、計劃する時にこれらの短所を未然に防ぐ様に考案すべきである。

共同作業の實際的方法についてみると、見方に依つて次の如き種々な場合が考へられる。それは分業的に行ふものと総合的に行ふもの（分業的と言ふのは一つの物を幾人か分業して共同製作すること、例へば燈籠の臺石、中央部部、屋根等を銘々で作り、之を総合して一つの燈籠にするが如きである。総合と言ふのは同じ様な物を銘々が作り、それを綜合組立して一つの場面を構成する共同製作で、例へば家屋、橋梁、電車、其の他の物を銘々に作らせて、それで町を構成する如き方法であるとの二種である。）

ロ、分團が全部同じ作業をする場合と、各分團が異つた作業を行ふ場合とがある。

ハ、授業中に行ふものと課外に行ふもの。授業中に行ふものには普通教室、特別教室、校舎外で行ふ場合がある。

課外には放課後或は休日が考へられる。

ニ、兒童間で行ふものと兒童教師一體となつて行ふものがある。

ホ、全員で一つの作業を行ふ場合と、數組に分けてなす場合とがある。

ヘ、時間を何時間か連続してなす場合と途中で休息して行ふ場合とがある。

共同製作實施上の注意

イ、目的を自覺させ全體の計劃と各自の分擔を明にして作業を進めること。

- ロ、初一念を買かずばやまぬ堅固な意志を以て作業に當らせ、一を全うして他へ移る様にさせる。
- ハ、試行錯誤に依らず、思考想像推理等の有意的方法で自發的興味を喚起する様に努める。
- ニ、作業の統一を缺き授業がやかましくなり易いから、常に規律のある學習態度を養ける様にする。
- ホ、教材は出来るだけ大單元にとり、豊富な知識内容を持つてゐることが大切である。
- ヘ、一班員の作業は出来るだけ少くし、高學年では戸外の實用的作業を多くする。

藝能科家事

I 藝能科家事の目的考察

一、女子本務の覺醒

女子は古來より家庭の仕事に一身に引き受けて働き以て家族制度の美風を發揮せしめた。それには古來の婦人が犠牲的精神を以て家を治めることが女子本然の姿であることを知つて己を空しうして家の爲に盡して來た。この姿こそ益、家庭の向上發展を進めるものであり皇國女子としてこの姿に目醒しめることが大切なのである。家を國家組織の單位とする皇國日本に於てこれはやがて國家の發展を意味し國體愛護の大義に通ずるのである。然るにこの認識が從來個人主義思潮の侵入と共に薄らぎはしなかつたかと思はしめる事態は決して少なくなかつた。かゝる時家事に於て

は女子本然の姿に目醒しむる様教育をなし眞にしつかりした婦人を養成しなければならぬ。

二、實務の教養

女子が受持つべき家庭の實務は甚だ多い。これ等實務の修練の如何は直接一家の經濟に關する事であつて一家の繁榮はやがて國家の盛衰にも關係するものであることを考へれば實務の修練が如何に女子にとつて必要な仕事であるかがわかる。故に實務は兒童の實生活に即し舊來の缺陷多き我家庭を刷新し傳統的仕事も科學的知識より合理の生活に導き、家庭の消費が十分の價値を生ずる様にして無駄は生活から排除する訓練が行はなければならない。かくして婦人の一人々々が一國の經濟は家庭よりの心構へを持ち又消費が一國の生産を左右し得るに至る様導かれねばならぬそれには如何に實務が女子に取つて大事な仕事であるか知らしめる必要がある。

三、婦徳の涵養

日本の婦人は家を愛護し家を發展せしむる爲には家風を尊重して家を齋へ夫に仕へて貞淑であり姑舅に孝養を盡し子女を愛し育てるに特別の愛情を以てする。この様に日本女性は家庭を守るに特別秀でた才能をもつて居ることが他國に見られない婦人の優れた點である。この特質の發揮こそ日本の女子教育の目標である。この目的達成の爲には實務の修練を通して婦徳の涵養に資する様にしなければならぬ。

I 藝能科家事の教材

一、家事教材の考へ方

家事が家庭生活を向上せしむべき任務をもつて居ることからその教材は兒童の實生活を向上せしめるに足るものでなければならぬ。これはやがて國民の生活の理解を深める爲に役立つものである。それは兒童の實生活の向上は郷土の生活の向上であり更に國民的生活の向上であるからである。地方的生活を離れて國民的生活はあり得ない。従つて教材は兒童の具體の生活に即してのものであるべきは當然である。

従來家事の教材は家庭生活の全部を通じたものであつたが國民學校に於ては衣類の問題は總べてこれは裁縫に統合された。然して新たに加へられたものに祭事と衛生とがある。これは我國の國柄から考へ又國家の使命から考へて當然な事と思ふ。

二、家事教材の選擇

イ、教材の生活化 家事は學校で學習した事項を直ちに家庭に於て應用し、各自の生活をよく觀察して自發的に研究する事が必要である。日々觸れて居る事項は能く之に親しみ、自然の間に事柄に對する豫備は備つて居る豫備知識を有する事柄に對しては興味を覚え、進んで研究して見ようとする氣持を起す故に、教材は兒童の生活環境より選ぶべきは當然である。

ロ、郷土の生活に即せしむべきこと 家事は家庭の實生活の指導であると共にその地方の實情に適合したものでなくてはならない。新體制下に於ける家事教育は従來の自家至上主義的生活より國家協調主義への轉換でなくてはならない。孤立的利己的な家庭を清算し家庭と家庭との提携を計り、更に國家と協調することによつて安寧と幸福とを廣す、新しい生活が生れる。家庭は郷土を離れて存在しない。従つて教材もその選擇の標準を郷土に置くべきもので

あることは言ふまでもない。

三、家事教材の排列

1、教材の系統を合理的に 従來の家事教材は(家事教科書による)實生活に即して一聯の系統はある様なもの、類似的な事項が孤立的に羅列されてあるが爲にその取扱に於ても同様な傾向が現はれて居た。家事はどこまでも家庭を中心としての生活指導であるからその排列も實際的生活的であることが大切である。例へば「住宅」と云ふ教材に就て考察して見ても單に「住宅」があり「井戸と水道」があり又「電燈」があるのではなく「我が住宅」と云ふ具體の姿を通して「井戸と水道」を考へ我が家の照明から「電燈」を考へる。又食品の成分に就て見ても「食品の成分を明かにして」「米飯」を考へ「味噌汁」を考へるのではなく、我が家の食物を扱ふことによつて食物の成分が必要になり米の知識も「飯の炊き方」「味噌汁の作り方」も必要になつてくる。これが即ち生活の實體なのである。家事は兒童の實生活の指導であるが故に教材の系統も生活の實體に基調を置き合理的にその精神が現はれる様に排列をなす事が望ましい。

2、行事との關係を考へること 國民學校に於ては行事を教授と緊密に關係せしめ「併せ一體」として教育の實を擧ぐることを教授の方針として居る。従つて教材の排列に於ても充分行事との關係を考へることは大切である。例へば「赤飯、胡麻鹽、筍、切鰯の煮メ」は従來は單に行事用の献立として扱はれて居たが國民學校に於ては國民的行事である端午の節句との關係を考へその精神を明かにし、その實際的指導として「赤飯」を作らせる。又「お萩キャベツの刻漬」も單なるお彼岸料理ではなく彼岸と云ふ祭事との關係の下にその精神を明らかにして「お萩」を作らせる

と云ふ様に考へたい。

3、他教科との關聯を考へること

(イ)國民科との關聯 家事は總べての教科及科目に關聯を持つとは云ふ様なものゝ、家事の目的が「婦徳の涵養」にあることからそれは家を基とした犧牲奉仕の精神の教養である。従つて國民科の實踐部面を實行する上に有效であると云へる。故に排列の上にもその關聯を考へ共にその目的に向つて努力することは肝要なことである。

(ロ)理數科との關聯 家事に於て食物、住居、育兒、看護、經濟に關する教材を取扱ふ以上理科による科學的知識に基礎付けられずしては到底合理的な取扱ひをなす事は出来ない。例へば食物の教材に於ても食品、調理法、器具の取扱ひ身體の構造組織から食物の消化等理科の知識を無視しては爲し得べき教授は一もない。故に家事に關する理科教材は家事に先立たしむる様兩者の關聯を考へて排列すべきである。

(ハ)季節を考へること 季節との關聯を考へ春夏秋冬の季節に適合したる材料方法等を表はし得る様に排列する事例へば四季を通じて季節に應じての料理を授けるとか、火鉢ストーブは冬の始めに於て之を取扱ふ等である。殊に料理は食品の關係上季節とは充分關聯を持たしむべきである。

II 家事教授の問題

一、家事教授の練成面

1、自發的學習態度の養成 家事は實務の修練を通じて婦徳を涵養することに使命があるのであるから實務を愛好

する云ひかへれば實務に興味を持たしむることは家事教授の目標とする所である。學校に於ける家事が何等家庭生活に利用されず學校だけに止まる事は兒童に進んでやらうとする氣持即ち追求的な興味を起さしめ得ざるが爲である。本來女子は家庭の實務には興味を持つもので幼時の「まゝごと遊び」等に於ても知ることが出来る。長ずるに及んで漸次興味が薄れ行くは自覺的な追求的な興味でないからである。従つて自發的に實務に參與しようとする態度が薄い、されば教材は兒童の實生活に即し必要感を感じしめ兒童の生活經驗を尊重し、その生活を指導することによつて興味を起させ兒童が自發的に實務を知らうとする心持を起させる。かゝる學習態度こそ最も大切なものである。

2、科學的態度の養成 家事は生活を科學的に處理し改善することによつて家庭實務の向上を計るものなのである。由來家事は稍もすると常識に依つて判斷し經驗によつて處理する事が多かつた。常識も經驗も相當の價値は有るものと認めるが然しながら其價値は絕對ではなくこれを基礎として學理の應用を期し科學的知識となすことによつて價値あるものとなる。故に經驗と併せ考へて實務を遂行し從來の家務の處理法につき再検討し、土地の情況、生活の實際に適應すべく而も日に新たなる科學の進歩を基礎として實務を處理し日常生活の改善に務むべきである。

3、實驗實習 家事は實務を通して女子としての人格を育成するのであるから實驗實習を通して正確なる知識を得しめることは教授上大切な部面である。何故ならば實務が單なる家事上の心得や知識のみならば敢て女子に限るべき教育ではない。家事が女子特殊の教科として課する意味はそこに技能と云ふ實務上の修練を目標としこれによつて科學的態度を養成して確實なる知識を得しめ物資の節約利用をなして勤勞を喜ぶ習慣をつけることによつて「婦徳の涵養」に資するからである。此の場合知識は實習に基礎付けるものであつてそこに兩者融合して一體となつて教授が行

はれるのでなければ眞の實驗習とは云へない。

4、郷土の生活に即して 凡そ教授を郷土の生活に切實ならしめんとすれば生活の具體なものに就て多角的に之を觀察する所がなければならぬ。例へば「すいとん」の教授に就て云へばその地方に於ける「すいとん」の料理をもととして中味の考察、汁の種類（味噌汁にするか清汁にするか）出しとしての鯉節煮干の比較等中味・調味料等から栄養經濟味覺の方面の検討を行ひ更に「國民食」として見た「すいとん」の一般知識を授けることは知識を確實にし兒童の日常生活に合理性を持たしめることとなる。

5、實務を通しての學 家事は作業によつて其價値を發揮すべき性質の科目である以上個人指導の機會も團體指導の機會も多く従つて兒童の個性を觀察してそれに適應した學が出来る。「學」とは單なる注意ではなく或種の行動を反覆して居る間に次第に容易さを増しそれが無意識的にまで練成されるのを目標として居るのであるから不斷の注意を以て清潔整頓に努め實驗實習の場合に於ては特に用具の入手をする様訓練しなほ喜んで働く習慣をつけ物の節約利用に努めしめて無駄なき生活をする事を教へ尙物の再生利用の工夫考案をさせる様努むべきである。これ等は學校だけでなく家庭に於ても常に之を實踐する様指導すべきである。

二、家事教材取扱上の留意點

1、祭事

イ、祭事の精神を明かにすること 我國は敬神崇祖を根本として家族制度に特殊の意義を有するものであるが故にその精神を明かにし君の恩祖先の恩に感ぜしめ國に報するの信念を持たせること。

ロ、實踐指導として 家庭では朝御飯が出来ると先づ神に祭り佛前に供へる。初めて物がとれた時には「お初」と云つて先づ神佛に供へる。此の様な美風は大いに助長せしむべきである。又一日十五日には櫛を飾り神棚に燈明を上げ小豆飯を炊いて供へる。又佛の命日には佛壇を掃除し香花を捧げて眞參をする等郷土に應じ家風を尊重しての實踐的指導が大切である。

2、敬老 我が家の今日ある所以を覺らしめ自らなる感謝尊敬の念と之に對する奉養の道を實行せしむ。

イ、身體上の奉養 衣服は軽く暖かにして着心地よきものを供し常に清潔に注意すること。食物は老人の嗜好を察しなるべく嗜好に合つたものを進め室内も清潔整頓に注意して日當りよく氣持よく住はしめる。又神社佛閣等の參詣親族朋友等の訪問に際しては快く世話する。

ロ、精神上の奉養 家事上の事は務めて相談し意見を聞く。但し心配事は知らせぬがよい。家庭は互に勵み合ひ家運を計り老人を安んぜしむること等、國民科との關聯に注意してその實踐を指導すること。

3、育兒 イ、我が國乳兒の死亡率の多い事を知らせ我國人的資源の大切な事を考へさせ身心健全な兒を如何にして育て上げるかと云ふ事を眞面目に考へさす。

ロ、實際生活に於ては兒童を子供と云ふ立場に於て兒童の經驗をもととして取扱ふ事に興味を起させその方法上の注意を知らせる。要は方法よりも育兒の根本をしつかりと教へて置く事が必要である。

4、衛生 イ、今日我が國の壯丁の體位は未だ大いに向上して居るとは考へられない。一家の衛生保健は特に主婦の手にあることを考へて導かねばならぬ。

ロ、その取扱に就ては兒童の實生活をもとにして住居、食物、衣服等を衛生的に検討し改善の點を明らかにし體操科との關聯を考へ進んで自の健康を保つ様生活の清潔化の實踐の修練が必要である。例へば

5、食物 イ、食物の材料はその土地の物を用ひること。材料は土地のものを用ひて合理的な料理を考へ徒らに外觀にとらはれず高價なものを以てよしとする風を一掃せしめる様にすること。

ロ、栄養を考へること 調理を合理的に行はうとしても之が基礎となる栄養の知識が缺けたらばその目的を達する事が出来ない。故に食物調理には栄養に關する知識が必要である。

ハ、調理法の合理化 調理はそれによつて栄養を増すのが目的であるが調理の各過程に於て從來栄養分の損失の多い調理を行つて居る。例へば米の炊ぎ方にしても野菜のゆで方にしても煮物にしても從來無駄な事が多い。一人にしては大した事はないが一生を通じて見る時或は國民全體として考へる時それは決して忽にする事の出来ないことであると云ふ事がわかる。合理的な調理を知らせる事は家庭の調理を合理化することとなる。

ニ、經濟の念の養成 一國の經濟は臺所からと云ふ言をよく味はせ物の有り難さに就ては物資不足の現在の狀勢から深く考察して眞劍に考へさせ一粒の米一本の燐寸も無駄にせぬ様な些細の事柄から物の買方物の利用等實習を通して無駄なき生活の鍊成が大切である。

6、住居

イ、郷土の實際に即し特に居間臺所便所の施設についてその改善を明らかにする。

ロ、生活問題としての家を考へさすことは必要である。住みよい家となすには間取、採光から井戸水道、電燈、墨

建具の手入暖房等總べて住居の實生活の問題として考へさせることは大切である。

ハ、防空に對する知識 將來の住宅は防空防火について相當研究する必要がある。この意味から學校報國團との關聯を保ち非常時に於ける心構へ及び應急處置、遮蔽裝置の研究等の實踐を通して燈火管制の國民的義務を知らせることに務める。

7、看護

イ、實生活に即することは大切なことである。從來看護の教材は如何にも羅列的、斷片的であつたが爲にその教授は得て抽象的になり勝であつた。故にこれを實際生活に於ける病氣を中心として如何に看護をなすか手當はどうするか、室は、衣服は、食物は等あらゆる事柄を病氣の中に統合して取り扱ふことは即ち看護の生活化であると思ふ。

ロ、救護室の家事化 家事に於て得た應急手當の知識は更にこれを修練させる意味に於て學校報國團等との關聯を計り學校看護婦指導の下に簡易なる疵の手當、繻帶の巻き方等の實務の修練を計ることは應急手當の生活化と共に望ましいことであると思ふ。

8、家計

イ、生活の具體に即して 實業科との關聯を計りつゝ具體的なる事項を基として豫算生活の必要を知らせ生活を再検討して節約利用に努め以て合理的な生活へと導くことが大切である。

ロ、家計簿記入の修練 一家の收入支出を記録して決算をなし將來の生活の指針を求めめることは大切な事である。然してこれ等記入の修練は兒童の小使、學費、家事材料費等をもとにする事は興味あることである。

I 藝能科裁縫の目的考案

一、普通衣類の裁縫

藝能科裁縫は普通衣類の裁縫に熟せしめる事に目的がある。普通衣類の裁縫とは現時の日常生活に缺くべからざる普通一般の衣類の工作技能、即ち衣類の製作及び之が構成上の能力を云ふ。然して工作には必ず技術を伴ふ。裁縫に於ける技術とは運針、縫ひ方、繕ひ方等でこれ等基本的技術を充分練成して習熟を計る事は衣服の考案工夫の能力を練る爲の根柢を確實にし更に創作への發展を期することとなる。然しながら實際に於ては時間の制限や材料に制限されて十分なる練習は困難なるもそれでも日常生活に役立つまでに技能の習熟を計り普通に用ひる衣服の裁縫を億却がらずに仕立てられる様知的に技術的に練成することは藝能科裁縫の目的とする所である。

二、衣類に関する生活的觀念の養成

裁縫は從來は衣服の構成部面のみを扱ひその他の事は家事で取扱はれて居たが國民學校に於ては裁縫は使用の目的により着用者により適切な衣類を選択するの能力を養ひ高尚な趣味の下に品位ある服装全般に就ての教育である。従つて從來家事に於て扱はれて居た事項は總べて裁縫に統合されて一元的のものとなつたのである。然してこれ等服

装に関する各種の知識は單なる知識に終らずそれが必ず常識となつて活用し又表現し得る様な實際的な力となすべきである。然してこれ等の常識を生活の場に於て考察してみれば、

イ、保健衛生的の立場から 生理衛生的立場から衣服の形態實質等について適切ならしめると同時に衣服の材料及び之が選擇（購入時の注意、即ち衛生上から如何なる地質材料を選んだらよいか）服の特長用ひ方等が保健衛生上如何なる關係を持つか活動的な衣服とは如何なるものであるか等についての常識を養ふ。

ロ、藝術的鑑賞眼から 衣服は人格の反映であり思想の反映である。故に着用者により適切な衣類を選択するの能力を養ひ着付により形色等の調和均齊を考へた高尚な趣味の下に品位ある服装生活をなし得る様常識を養ふ。

ハ、經濟的方面より 地質・價格・整理（手入洗濯染色）保存・使用期間・使用法・更生法に就ての常識を養ふことによつて資源愛護の精神の徹底を期す。

ニ、儀禮上より 身分相應の品位を保つ爲に相當の禮容を整へる事は肝要である。洋服にしても和服にしても服装に就ての常識は大切な事である。又土地の情況に於ても用ひる場合に於ても相當の常識を備へて居ることも亦大切な事である。

三、婦徳の涵養

婦人は一家の中心となつて一身を献げて奮闘努力して家庭の繁榮向上に努めなければならない。それが國に盡すこととなるのである。又婦人の特徴とする優しさ、和やかさ、忍耐力等の美德は裁縫を通じて養成しなければならぬ。又學校に於ける裁縫は單なる手先の仕事ではなく魂を打ち込んでやる心持ちを養ひ、實用品を扱ふことから物の

有りがたさを知らしめ従つて物を大切に取扱ふ習慣を養ふ。これ等の諸徳を涵養することによつて皇國女子の教育に資する様努めなければならぬ。

四四四

I 藝能科裁縫の教材

従来裁縫はその製作が中心であつたが、國民學校に於てはその内容が擴充されて衣類全般にわたつて授けることになつた。その上初等科に於ては従來の時間數より五年六年に於て一時間づゝ減少されたのである。こゝに於て考慮すべきは内容とその取扱の方法を如何にすべきかの工夫の必要さである。初等科に於ては徒らに實物を縫ふ事のみを主體とせず衣類の構成の基本となる材料を取りよく理解せしめ合理的に裁縫せしむることによつて技能を確實になすべきである。

一、裁縫教材の選擇について

1、郷土的生活的なもの 凡そ人情風俗習慣は其の土地々々によつて異なるものである。大都市と片田舎、商業地と工業地、山國と海岸地帯、寒國と暖國いづれも多少の異はある。従つて服装も一樣とは云へない。裁縫は兒童の衣服生活の指導であるが故に教材も兒童の能力に應じ生活環境より選んだ郷土的生活的のものでなければならぬ。かくして選ばれた教材は兒童の興味を中心となり自ら研究しようとする態度を作り自發的學習能度の養成に役立つこととなる。

2、基本的なもの 裁縫は裁縫の基礎を作る事が最も重要な點であるが故に材料も基礎的教材に重きを置かねばならぬ。

らぬ。殊に國民學校に於ては初等科の教授時數が四年五年に於て一時間づゝ減少したが、その内容に於ては従來以上の効果を擧げる事に期待するのであるから徒らに衣類の種類を多く課すことなく充分研究して基本的模式的なものを選びそれをよく理解させることによつて裁縫の能力を養ふべきである。初等科四年に於ける教材は殆ど全部基本的なものでよい。その間に多少の應用的教材を課せばよいわけである。

3、能力に應じたものたるべきこと いづれの教科に於ても兒童の心身發達の程度を顧慮して教授すると云ふ事は述べるまでもない。而しながら事實はこれと反對で従來は兒童の理解せるや否やと云ふことよりもたゞ結果のみを見て多く仕上げる事を以て裁縫は上れりと考へ工夫も考案もなく唯教材に迫はれて兒童は單に器械的に模倣をするに云ふにすぎなかつた。これは義務教育が六ヶ年であつたために卒業までに衣類の一通りに觸れしめたいと云ふ考へから自然能力を無視した扱ひになつたことと思ふ。國民學校に於ては義務教育が八ヶ年に延長されたのであるから衣類の内容を高等科卒業までに扱へばよいこととなつたのである。従つて初等科に於ける時間數も減少されたのであるから負擔も軽減されることになつた。故に教材は出来るだけ精選して能力に應じたものを選び衣服構成の能力を養ふ様に務むべきである。

4、季節的のものをえらぶべきこと 季節に合つた教材は兒童の誘意性も強く早く仕上げて使用したい氣持は自ら興味を起し教授の効果を大ならしめる。又材料を整へる上に於ても便利が多い。

二、裁縫教材排列について

1、排列は系統的たるべきこと 裁縫は技能的方面と家事的處理の方面との分離を避け一貫した系統を追ふて教材

を排列せしめる事は大切な事である。例へば織物の織維にしてもその見分け方にしても又洗濯手入保存にしてもこれを個々の事項として考へず衣類として考へる時には當然包含されるものである。故に教材の排列にもこの精神を生かす事は大切な事である。

2、教材の關聯を計ること 教材相互の關聯を計ることは教授の効果の上に及ぼすこと大である。各學年の教材の關聯も大事であるが技術の關聯も考慮することは教授を容易ならしめる。なほ又教科内は勿論他教科との關聯を計ることも一層大切な事である。裁縫は全教科に關聯あるとは云ふものゝ殊に修身算數理科家事圖工等との緊密な關聯を計ることは時間の上からも勞力の上からも又兒童の學習の上からもその効果は大である。故に排列の際も教材相互及び他教科との關聯を考へることは大切である。

II 裁縫教授の問題

一、裁縫教授の練成面

1、基礎技術の修練 裁縫は單なる遊戯的な工作であるならばその計畫が即興的であり趣味的であつてもよいわけであるが苟も裁縫となつて實用に適すべき物を工作する以上そこには實用を目指す目的を持たなければならぬ。實用を目指す目的とは即ち精巧と迅速とである。基礎技術の修練はこの目的に向つてなされるもので衣服構成上重要な要素で建築の基礎工事にも比すべきものである。如何に理想的に能力が養はれても基礎となる技術の修練が充分でなかつたならば眞の工夫創作は期し得られない。故に運針始め其他の基礎となる技術の修練は初等科より高等科に至る

まで忽せにしてはならない。

2、自發的學習態度の養成 衣服を縫ふと云ふことは兒童に取つて極めて愉快な事であり又極めて眞剣味を持つ勞作體驗である。従つて模倣に囚はれたり單なる衣服出來上りを目指す盲目的活動に陥つてはならない。ここに於て教授は從來の出來上り主義裁縫を目指す實質陶冶主義より更に適切なる形、色、質等の批判、工夫考案の陶冶、なほ進んでは創造力に及ぶ陶冶が必要である。從來裁縫は如何にしてよく教へ込まうかと考へられ標本の苦心も方法の工夫も總べて教へ込む爲のものであつたと云つてよい。従つて自ら苦んで工夫し考案すると云ふことは少なかつた。これ等工夫考案の力を養ふには興味を持って自ら進んでやろうとする心持を作ることにあるのでこの心持は即ち自發的態度の基礎となるものであるからこの態度の養成は缺くことの出來ない重要なことである。

3、觀察眼の養成 觀察眼の養成は衣服を創造する使命を持つ裁縫に於ては必要缺くべからざるものである。然して觀察の態度は構造の上から仔細に觀察させる。例へば衿先の縫方に於ても出來上りの構造の上からその縫方を觀察させ疑問を持たせその疑問の解決の上に縫方を工夫させる、と云ふ方法はやがて創作しようとする心の芽生を作るものである。從來はかゝる技術的な場所には何等疑問を起させずあるがまゝの姿に模倣させることに苦心して居た場合が多かつた。従つてかゝる兒童は單なる形だけの模倣より一步も出なかつたと云つてよい。觀察眼の養成が工夫創造の能力を養ふ裁縫科に於て當然考へられなければならないことであると思ふ。而してこの觀察眼の養成には物の見方の指導が必要である。即ち何を觀察するか、どこを觀察するか、の目的を明かにし更に如何に觀察するかの方法の指導をなすことは大切な事である。

4、鑑賞眼の養成 観察眼の養成は更に鑑賞へと発展して行くものである。鑑賞は只美しく感じると感じる感受性許りではなく巧みに着付した姿や色の取り合せの巧妙さ、装飾の巧みさ、形のよさ等敏感に受け入れ、巧い拙いの判断を下してその価値を知り分ける力即ち知的審美眼でこの知的審美眼を養ふことは高尚な趣味の下に品位ある服装生活をなす上に必要なものである。鑑賞には形象の鑑賞と技術の鑑賞とがある。両者は各々その目的を異にするをもつて鑑賞の際兒童に鑑賞の目的を持たせて指導することは大切な事である。

5、裁縫に於ける美 裁縫は作業を通じて個人を指導する機会多く随つて個性を観察してそれに適應した装をなす事は大切な事である。装は又物を作る事によつて物の利用、節約、清潔、整頓等の習慣を養ひ、物の有り難さを知らせ、糸の節約、布端に至るまで無駄なき様装ることが大切である。又姿勢は正しくする事によつて作業の能力を増し健康の上からも大切な事を知らせ言語動作をつしむ物の受け渡し、成績品の提出に至るまでこまかい注意が必要である。なほ又喜んで勤勞に服するの習慣を養ふ事も大切である。

二、教材取扱上の留意點

1、基礎技術

イ、運針練習 運針は布巾縫合の基礎となるものであるから正しい方法に於て十分練習させなければならぬ。それには正しい姿が作業の能率に關係すること多きを知らせ體練科との關係を計り又完全な活動は心身統一によつてのみ生れることを知らせて魂を込めての練習が必要である。又用具の整理整頓は仕事の手順をよくする上にも大切な事である。

ロ、各種基礎技術の練習 運針と同時に各種基礎技術の練習も忽せにしてはならない。その方法については技術の目的を明かにして正しい方法を會得させることが必要である。なほ又基礎技術は簡単な教材によつて裁方縫ひ方等の技術の練習を計ると同時に其の構成法をも知らしめ以て衣類構成の基本準備となす。

2、和服教材

イ、地質 初等科に於ては地質に就て木綿及新興織物の知識を得させ簡易な繊維の見分け方、洗濯等、日常生活に緊密なる關係をもたせてその取扱上の注意に及び高等科に於ては更にその程度を高め毛織物、絹織物、交織物、麻布等について繊維の知識、手入保存、洗濯法等の實際的指導を行はねばならぬ。然して布の整理はその布の特質に應じて確實な知識と技能とを練る様に心掛けねばならぬ。

ロ、解き方 解き方は衣服の解剖と云つてもよい。衣服の構成を知らせる爲には先づ之を解かせて見ることによつて如何なる布が綜合されて構成されて居るか、布の數及布の形の觀察によつて裁方を工夫考案して確實なる裁方の知識を得させる。又この綜合されたものを圖寫する事によつて裁方圖は眞に理解されたものとなる。

ハ、裁方 初等科に於ては徒らに實物を縫ふ事のみを主とせず衣類構成の能力を養ひ裁つ事によつて布の扱ひ方、尺度の使用法、折り方、裁ち切り方等の基礎を養成し更に高等科にありてはその程度を高め裁方に於ける基礎技術の修練、裁方の應用、柄合せ古着の利用再生による裁方の工夫考案等の創作的知識を涵養することが大切である。

ニ、縫ひ方 基礎技術として得た縫方は衣服の製作上に直接役立つものであるから絶えず基礎技術との關係を計り確實なる縫方をなし衣服を通して技術の修練を計ると共に、衣服着用の目的から縫方の考案、即ち針目の大小縫代の

仕末、糸の留め方つき方等きれいに仕立上げると云ふ事から特別な技術上の修練が必要である。高等科に於ては更に能率的に縫ひ上げるには如何様になすべきかの工夫研究の態度の養成と正確な基礎技術の應用に努めしめる様指導することは必要である。

ホ、批評鑑賞 批評し鑑賞する材料は柄は鑑賞材料として適當でなくとも正しい縫ひ方、寸法の正確と云つた技術方面の鑑賞指導と着付によつて柄色彩等の美的方面による鑑賞の二方面の指導が必要である。更に又色、柄については反物で見た時と衣服として出来上りから眺めた場合とでよく引立つものと引立たぬもののあることを實物を通して批評し鑑賞させることも大切である。これはやがて衣服調製上の常識の基礎となるものである。たゞ注意すべきは此の際兒童の氣持を害はない様にすべきである。かゝる鑑賞材料は教師が準備して置く方が無難である。

3、洋服教材 洋服教材の主眼とする所は日本化された活動服としての研究工夫が大切である。和服との比較によりその長所短所を明かにし服装としての理想を感じしめることが必要である。

イ、デザイン 洋服は流行が形象に及ぼし個性が形象を創造する事から形象に基くデザインの指導は大切な部面である。デザインは決して贅澤な流行を指導するのではなく、正しい服装への鑑賞眼を養ふ爲め指導であることの意味を充分理解させることは必要である。要はどこまでも兒童を主體として直觀に訴へ形の良否色の配合地質の知識等圖畫との關聯を緊密ならしめて正しきデザインを構案工夫せしめる様指導せしめること。

ロ、採寸 洋服は和服の様形に一定して居らない爲に裁断に先立つて型取りする必要がある。和服は着付によつて着姿を作つて居るが洋服は着用者のからだに合ふ事が形を作る上の生命である。故に製圖の前にはからだに合せる

仕爲の採寸が必要になつてくる。採寸は技術的修練の必要なもので正しい寸法の採り方は中々困難であるが出来るだけ正しい計り方の修練を積ませる様心掛けることが必要である。又採寸は上着、下着によつて注意すべきものであることを知らせる。

ハ、製圖 製圖にあつては身體と圖との關係を明らかにし一本の線も如何なる理由によつて引くかと云ふ線の持つ意味をはつきりとつかませ、又前後の差等も何故かの理由を身體をもととして考へさせる等の理解に基づいた指導が望ましい。

ニ、裁断 布を裁断する場合には布目や縞の模様等から型紙を如何に配置すべきかと云ふ型紙の位置、又如何に配置したれば經濟的に布の使用が出来るか、或は裁切る順序縫代の付方等の點に注意して充分に兒童の工夫力を養ひつつ自覺的に裁断させることは必要な事である。殊に兒童はうつかりすると早く裁ち切る事を急ぎ布を不經濟に使用したりする等のある事故しつかりした洋裁の基本的素地を作ることが大切である。

ホ、縫方 縫方等も教師の授けた順序方法でなく實物の觀察により兒童自身に研究されその研究をもとにして縫方の順序方法を決定する様に指導したい。見返し、持出し、衿ぐりの仕末等は洋服の基礎技術であるが故にその方法を確實に知らしむる事は大切である。ミシン使用法に於ては初等科に於てはミシンに對する一般的知識と踏み方の修練をなし高等科に於てはその程度を高め機械の取扱ひ方に慣れさせる。

昭和十六年三月二十五日印刷
昭和十六年三月二十八日發行

國民學校の「場」の經營
定價書圖八拾錢

著者 內田安久

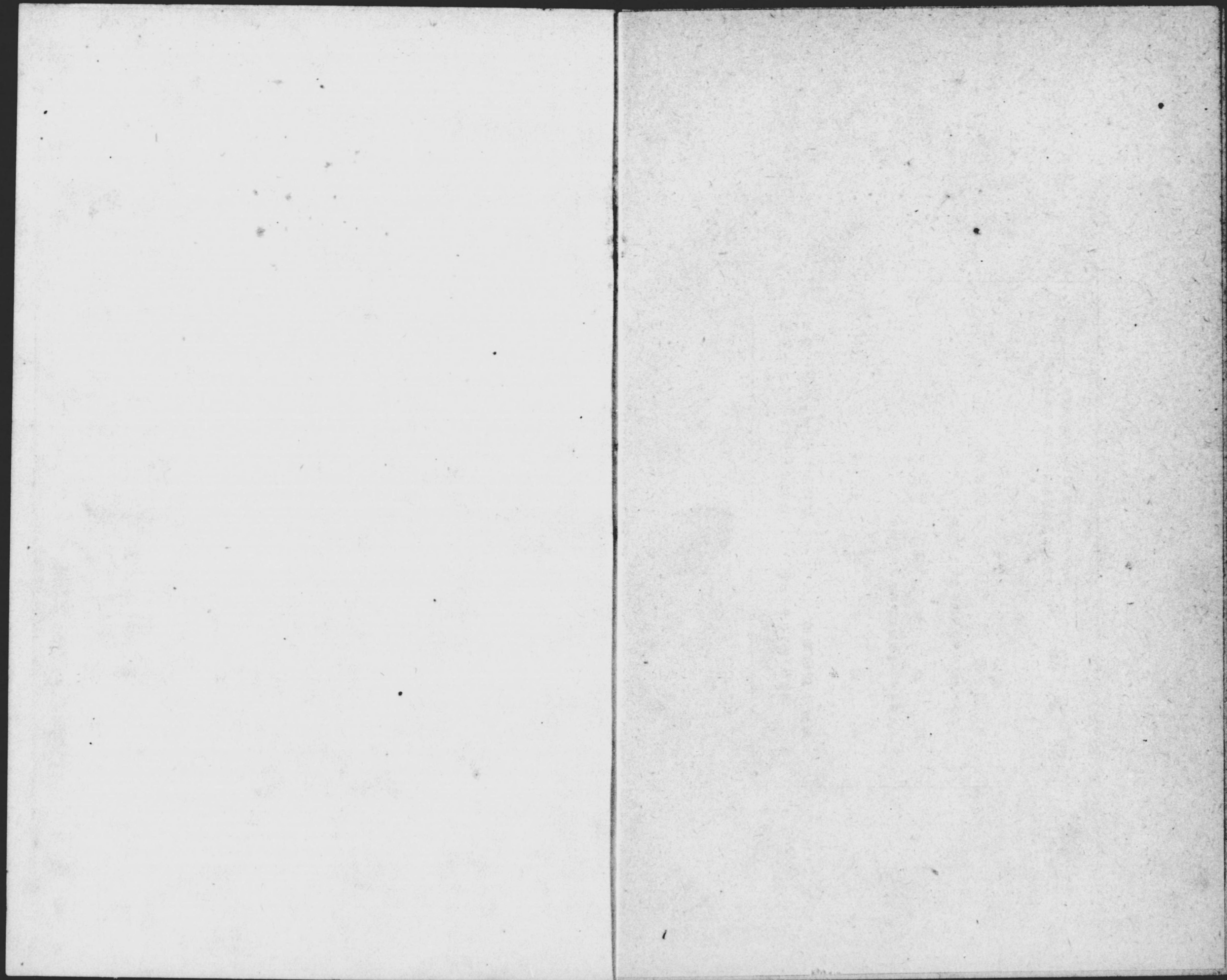
發行兼印刷者 長宗泰造
東京市小石川區高田豊川町三十七番地

印刷所 厚徳社印刷所
東京市小石川區高田豊川町三十七番地

發行所

東京市小石川區高田豊川町三十七番地
振替東京九〇六三一番 電話牛込六五七七番

厚徳書院





263

459

